

1993年度教育研究学内特別経費

言語研究Ⅳ

1 9 9 4

東京外国語大学

「品詞」現象は人間の言語につきものです。ただしそれは、人間の言語を支える原理から言って、表意単位の種類が一つの言語の中でただ一種類ということはありません、という意味です。幾つかの類をなす表意単位がどの言語にも含まれるだろうという意味で、「品詞」現象は人間の言語につきものだ、ということが言えます。従来の「品詞」概念の奥に、このような一般的な「品詞」現象を問う問題意識を読み取ることもできます。と同時にそこには、その現象をその時、その時の言語理論がどう理解したか、という側面もまた当然含まれています。いいかえれば「品詞」概念には理想的な面（理念として私たちが追い求めなくてはならない面）と、現実の面（これまでになされた限りでの品詞の理解）とがあります。「品詞」現象そのものに、絶えず「品詞」という概念を当てて置くことは、当然のようにも見えますが、また既にあるやりかたで理解された「品詞」概念を念頭に置くら、そのことは議論をやや紛糾させるもとであるとも言えそうです。

しかし事柄にその両面があることは事実です。問題は「品詞」概念を、それぞれの言語理論の中でどう規定するかであり、規定の仕方によっては、新しい内容の概念が「品詞」という呼び名のまま出てくることがあり、また新しい概念が、内容だけでなく呼び名も新しく、真新しい別の概念として姿をあらわす場合もあります。ここで紛糾が避けられてもこの問題は何かで必ず、紛糾を続けるわけであり、だとすれば、その全体状況に対する<構え>を持つことの方が余程大切です。

品詞の問題を以上のような大きな文脈の中でとらえ尽くすには、統辞と形態の両面から人間の言語の仕組みを深く理解し、更にまた理論構築の機微にも通じる必要があり、その意味ではやや息の長い作業がこの問題の整理のためには必要となります。私たちはここに、その最初の共同作業を公刊するわけですが、それによって恐らく、問題のごく一部を明らかにしたに留まることを銘記して置くべきでしょう。

我々の『言語研究』も四年目を迎えました。多くの方々が仲間としっかりした議論の場を持つには、おそらく、前後少なくとも十年程の辛抱は絶対に必要でしょうが、その日が訪れる頃にはこの研究誌も、東京外語大学の研究者の間に一つの市民権を獲得していることでしょう。現在の若い諸君が次の世代の人たちと、これからもこの議論の場を更に拡げて下さることを信じつつ、ここにまた一卷の『言語研究』を刊行できることを望外の喜びとします。

1994. 1

執筆者を代表して

渡 瀬 嘉 朗

目 次

品詞の選択	渡瀬 嘉朗	1
-------------	-------------	---

Les syntagmes nominaux ou les dépendants

positionnels	Yoichiro TSURUGA ...	14
--------------------	----------------------	----

ドイツ語の品詞分類	在間 進	25
-----------------	------------	----

ドイツ語と日本語の「名詞」の比較	在間 進	30
------------------------	------------	----

名詞における『数』－単数と複数－	在間 進	33
------------------------	------------	----

中国語の動名詞	望月 圭子	39
---------------	-------------	----

現代朝鮮語の語彙分類の方法	野間秀樹	45
---------------------	------------	----

*

言語事実と理論	馬場 彰	69
---------------	------------	----

品詞の選択

渡 瀬 嘉 朗

- | | |
|-------------|----------------|
| 1. はじめに | 4. 品詞と「語」 |
| 2. 品詞と統辞関係 | 5. 人間の言語と品詞の区分 |
| 3. 品詞と形態的处理 | 6. 結論 |

1. はじめに：

1-1. 話者の言語行為と品詞：

品詞の選択と題したのは、問題を話者の言語行為を通じて、考えて見たかったからである。「品詞」とは、万人がよく知っている概念であるが、話者はこれを何時選ぶのか、それほど明らかでない。

表現を通じて意味を操作する場合に、私たちは確かに一方では意味内容を、一方ではそれを伝える言語形式を切り離して問題にすることができる。一方は無形の意味内容であり、一方は形（意味の容器）だからである。注意しなくてはならないが、この意味内容にはそれ自身の姿を写す固有の鏡があるわけではない。私たちは意味内容を、自分の選んだ様々なく表現に写してとらえることしかできない。それは誰でも知りすぎる程よく知っていることであろう。私たちの認識行為を、様々な、表現のメディアで扱う場合と全く同じである。ここでも私たちは自分たちの認識行為をその絶対値でとらえることは出来ない。さまざまなメディアに写してとらえることしかできないのである。それが数式や図式であろうと、また新しく開発された視聴覚メディアであろうと、メディアはメディアであって決して認識行為の絶対値ではない、という意味では通常の言語表現の場合と全く変わらない。また、だからこそ、絶えずメディアにつきものの、固有の歪みを問題にしなくてはならなくなる。認識行為そのものが絶対値をもたない以上、それは、さまざまなメディアに姿を写しながら行われる（遂行される）ので、その結果は私たちの認識行為そのものが、一般にメディアの歪みを気付かずにそのまま取り入れながら行われるのが普通である。例えば日常のことばが、その社会にいきわたった差別の意識や社会的偏見を含んでいる場合、私たちの認識までその差別の意識や社会的偏見を写しながら遂行されるのが、その好例である。この例から判るように私たちの精神活動にはそれを写す（それをとらえる）固有の陰画紙がない。必然的に、私たちが選んださまざまな表現メディアを鏡として、そこ

に自分の姿を写し出さなくてはならない。それはここで問題の、言語表現を通じて意味を操作する場合でも全く同様である。

品詞との関連を考えながら、やや具体的に問題を見てみよう。例えば「家をさがす」chercher une maison という表現の中で私たちは一回、名詞表現を用いている。「家」(une) maison である。それを chercher où s'abriter 「身を隠すところを探す」といえば、この名詞表現は既に、動詞表現から派生する別の表現に姿を変えているといっていよい。この例では私たちの表現意図が、一つの名詞に遭遇したときに、つまり名詞パラディグムの中の一項である maison 「家」に出会ったときに、私たちの表現意図は「家」(une) maison の中にその姿を写し、意味を形成する。それが成就するのは一つの名詞を選ぶのと同時である。

この事は私たちに何を教えるだろうか。

1-2. 品詞と無標の結合性：

例えば「家をさがす」chercher une maison という表現の中で私たちの表現意図が一つの名詞と出会ったその時に、意味内容もまた、客観的な容器の中で形成され一人歩きを始める。それが名詞的な意味であり、その表現形式、いわば外部形式が＜名詞＞である。では名詞とは何か。私たちの表現意図が出会った表意単位、語彙が、一定の結合形式——今度は明らかに統辞のレベルで——に合わせて動くものということである。例えば、この場合についていえば動詞 chercher の目的辞の位置に現れ、動詞そのものにその要素の機能（文の中での役割）を示してもらう事ができるということである。動詞そのものにその要素の機能（文の中での役割）を示してもらう場合、その要素自身に予め決まった自分の働きが課せられていない方が好都合である。一般に名詞といわれているものは、そのような位置（文中での役割を何らかの他の要素に示してもらうことのできる位置）で使われることを前提にし、そういう含みを主としてもった要素である。私たちがこんな風なかたちで名詞的な意味に出会うということ、そしてその表現形式、いわば外部形式が＜名詞＞である、ということは、もう一つ突っ込んだ観方をすればどうということなのだろうか。私たちが名詞的な一つの意味から＜出発＞して、＜次に＞それをマークしてくれる名詞を選ぶ、というわけではないのである。私たちがさまざまな統辞モデルの中から「家をさがす」chercher une maison というような統辞モデルに出会ったとき、その中で、私たちの表現意図を実現させてくれる名詞（これはその結合形式、つまりどういう位置で使えるかで決まることである）に内容を託す気になったということに外ならない。品詞は、これから選ぶものではなく、表現意図実現の容器になったものである。この容器は別の言い方をすれば一つの語彙であるが、もう一つ別の言い方をすれば、動詞の目的辞や主辞の位置に出てくる、あるいは前置詞の後ろの位置に出てくる、そういう性格の表意単位（品詞）であったということである。

こういった意味では、品詞は、表意単位に私たちが選んで加えるマークではない。表意

単位を、その現れる位置などで拘束する性格であって、私たちのいわば無性格な表現意図がそこで初めて形をとり、実現する場なのである。

以下の考察では、言語活動において、言語の使用者が先ず名詞的なあるいは動詞的な意味を思い浮かべ、しかる後に名詞あるいは動詞のパラディグムから一つを選びだす、という捉え方をしない。もはや、そのようなとらえかたをすることができない。私たちにとっては、品詞とはある統辞的な結合性を示しはするが、それは使用者が<マークとして選べない>結合性である。品詞はたしかに統辞的カテゴリーを示しはするが、それは話者がある文脈で語彙を選ぶときの、その選択行為そのものが示す統辞性に外ならない。

2. 品詞と統辞関係：

2-1. 品詞の示す統辞性：

品詞に関連する主要な問題（論点）は二つある。一つは品詞が統辞関係とどのように係わるかという問題。もう一つは、言語組織の形態的处理にどのように係わるかという問題。第一の問題をこの章で扱う。

すでに見たように、品詞はある統辞的な結合性を示しはするが、それは使用者が<マークとして選べない>結合性である。品詞は統辞的カテゴリーであるが、その統辞性は、話者がある文脈で語彙を選ぶとき、その選択行為そのものが含む統辞性に外ならない。そのような統辞性は、統辞関係で最も一般的な<限定関係>を例にとっていえば、<選択できる限定関係>と<選択できない限定関係>のうち、後者、つまり話者が選択できない限定関係を意味する。その点を中心に、品詞のもつ統辞的な結合性を明らかにしよう。

2-2. 限定関係：

<限定関係>と呼ばれる統辞関係を考えてみよう。

すべて、このような概念の問題は、一つにはそれがあらわす事実関係の問題だが、同時に定義の問題、定義のしかたのの問題でもある。そこで<限定関係>を、二つの辞項のあいだの一定の関係、二つの辞項のあいだに設けられた<辞項→辞項>、あるいは<辞項←辞項>の関係であって、ここで<→><←>は矢印の元にある項が表現から消える時に、二つの辞項からなっていた表現が一項に単純化され、しかも表現として成立する関係としておこう。従ってこの関係は名詞←形容詞、動詞←副詞、動詞←目的辞の関係には当てはまるが、主辞+述辞の関係 (Nexus)には当てはまらない。

それはまず、たとえば「美しい→花」や (un) homme ← savant 「物知りの男」のような関係である。さて「美しい→花」や (un) homme ← savant 「物知りの男」のような限定関係は「はげしく→抗議する」 protester ← vivement にも認められる。〔矢印の元にある項「はげしく」あるいは vivement が表現から消える時に、二つの辞項からなって

いた表現が一項に単純化され（「抗議する」*protester*）、しかも表現として成立するからである。）やや状況が違うが「料理を→食べる」「太郎が→食べる」にもこの関係は当てはまる。同じく *(Taro) mange ← (le) plat* には当てはまるようだが *Taro + mange (Nexus)* にはこの関係は当てはまらない。

そのことは二つの面から確認されねばならない。まず *Taro + mange* における二つの項、つまり *Taro* と *mange* だが、この二つの項が独立した項、いわば独立変数であることには疑いの余地がない。その意味では *Taro + mange* は、「料理を→食べる」「太郎が→食べる」に同じであり、また *(Taro) mange ← (le) plat* にも同じである。このように *Taro + mange* の2項は独立変数であるが、この二つの独立変数の間に隠されている関係は、「料理を→食べる」「太郎が→食べる」や *(Taro) mange ← (le) plat* の場合とは異なる。

Taro + mange が隠している関係は、ほぼ [...] + *mange* という形で表現できる。ここで [...] は、具体的にいえば *Taro* に代わり得る何らかの辞項ということになる。〈... に代わり得る何らかの辞項〉は、ある〈形式的条件〉（*Taro* に代わり得る形式でなくてはならない）を満たし、ある〈内容上の条件〉（*mange* が許容する内容上の条件）を満たさなければならないが、この後の〈ある内容上の条件〉の方は、後ろに続く辞項を [...] + "*prédicats*" のように一般化すれば消えてしまう。従って [...] は、〈*Taro* に代わり得る形式でなくてはならない〉という形式的条件さえ満たせばよい辞項であることになる。それ故 [...] + "*prédicats*" は、そのような辞項であればよい何らかの辞項の〈義務的存在〉 *présence obligatoire* を示しているといってもよい。

さき程、〈限定関係〉を、二つの辞項のあいだに設けられた〈辞項→辞項〉、あるいは〈辞項←辞項〉の関係であって、ここで〈→〉〈←〉は矢印の元にある項が表現から消える時に、二つの辞項からなっていた表現が一項に単純化され、しかも表現として成立する関係、と規定したが、〈限定関係〉をそのような関係であるとする、[...] + "*prédicats*" にはそのような関係は当てはまらない。[...] + "*prédicats*" は何らかの辞項の〈義務的存在〉 *présence obligatoire* を要求する関係であるから、むしろ：

[...] ↔ "*prédicats*"

とあらわされなくてはならない関係である。

2-3. 〈選択できる〉限定関係と〈選択できない〉限定関係：

限定関係には、〈選択できる〉限定関係と、そうでないものがある。

上で見た例の中で明らかに〈選択できる〉限定関係と考えられるものは、*protester ← vivement* であり、同じく「料理を→食べる」「太郎が→食べる」、同じく *(Taro)*

mange ← (le) plat である。

注意しなくてはならないが、選択出来るか出来ないかを問う必要があるのは言語材の性格についてであって、話者の一回限りの行為そのものについてではない。話者が一回限りの行為を通じて *Il proteste vivement*. (「彼ははげしく抗議する」)、「料理を→食べる」「太郎が→食べる」と述べたときに、その行為の中で、*vivement* に *-ment* がつかつかないか選択の余地があったかどうかとか、あるいは「料理を」が、「料理が」「料理に」などとの間に選択の余地があったかどうか (etc.) を問うことにはまるで意味がない。敢えていえば話者の一回限りの行為には、その他の選択の余地など、無かったに決まっているだろう。

私たちがここで考えねばならないのは、様々な意図を抱いた不特定多数の話者が言語材を前にしたとき、その言語材が、一種類の用途にしか役立たないか、それともその中に分節が隠されており、部分を他の切片と交換することによって異なった意図をもつ他の話者の役にも立つものであったかどうか、ということである。そのような観点から見ると、*vive + ment*, 「料理+を」「太郎+が」を用いる話者は、言語材の方にはこの組み合わせに至る必然性は何らないのだから、彼の選択によって、そこで “+ ment、+を、+が” を選択したことになる。同じように *manger + (le) plat* についても、(le) plat という要素は、決して他動詞 *manger* に奉仕するためにのみつくられたものではないのだから、他動詞一般+ (le) plat という可能性の中で主辞の位置にも (前置)、目的辞の位置にも (後置) 置かれる可能性をもっていたと考えるべきであろう。

このような、<選択できる>限定関係を見ると、限定関係を設定する方に必ず、話者の選択による表現の固定性の廃棄が許されているのが見える。その存在は、決して限定関係の成立のために必要不可欠ではない。事実、フランス語の形容詞は (*corriger + ible* のような例を除けば) 形容詞表現の固定性をかえることはできない。副詞も (*vive + ment* のような例を除けば) 副詞表現の固定性をかえることはできない (cf. *vite* など)。

日本語の形容詞 (+イ型) 副詞 (+ク型) には、確かに通時的観点から見ると、かつての話者の選択の可能性を示す痕跡は残っている。「やさしい男」「はげしい抗議」「おいしい料理」「楽しい音楽」「疑わしい説」「悲しい話」「苦しい時」などなどである。

だが、現代日本語では「うつくし+い」「やさし+い」「はげし+い」「おいし+い」「楽し+い」「疑わし+い」「悲し+い」「苦し+い」の「うつくし」「やさし」「はげし」「おいし」「楽し」「疑わし」「悲し」「苦し」etc. は単独では使いにくい。たしかにこの部分は、「うつくし+く」「やさし+く」「はげし+く」「おいし+く」「楽し+く」「疑わし+く」「悲し+く」「苦し+く」etc. や、「うつくし+さ」「やさし+さ」「はげし+さ」「おいし+さ」「楽し+さ」「疑わし+さ」「悲し+さ」「苦し+さ」etc. のようなく派生のテーマ>にはなる。(「痒い」:「かゆ+い」、「かゆ+く」「かゆ+さ」も同列であろう。) しかしこのようなく派生のテーマ>は、明らかに共

時論では、単独の統辞単位として文構成の一次的な関係を引き受けることは出来ないと思われるだろう。

以上で、品詞はある統辞的な結合性を示しはするが、それは使用者が<マーク>として選べない結合性であることが、ほぼ明らかになったであろう。品詞は統辞のカテゴリーであるが、その統辞性は、話者がある文脈で語彙を選ぶとき、その選択行為が全体として含むグローバルな統辞的結合性に外ならず、自由で分析的な統辞的結合性ではない。

3. 品詞と形態的处理：

3-1. 文構成要素のランクと品詞のそれに対する負の対応：

既に述べたように、品詞に関連する主要な問題（論点）は二つある。一つは品詞が統辞関係とどのように係わるかという問題でこれは前章で扱った。もう一つは、言語組織の形態的处理にどのように係わるかという問題で、これをこの章で扱う。

私たちがとりわけ、この章で考えて見たいのは、文の構成要素のランク（述部に対する一次的、二次的、三次的 ... 関係に見られるランク）と品詞の関係である。この関係は概して<負の関係>といってよい。つまり、品詞の側から構成要素のランクを区別して示すことは一般にないと考えてよく、重要な例外としては、主節の述辞と従節の述辞との間の形式的な差異（例えば【仏】の接続法の使用、【英】の should + root など、あるいは関係節、名詞節中の不定詞の使用など）がある。この述辞の形式的な使い分けは大いに興味ある事実であるが、ここでは私たちはむしろ、<負の関係>の方に目を注ぎたい。その大きな理由は、少数の形態を用いることで多くの必要をまかなうという、人間行動に本来備わる経済原則がこの<負の関係>を通じて垣間見られるからである。

3-2. 文の構成要素 vs 話者の選択の母体：

(a) Il part ⁽¹⁾ tout de suite.

「彼はすぐさま出発する ⁽¹⁾」

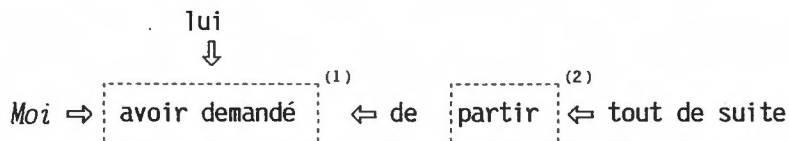
lui ⇔ *partir* ⁽¹⁾ ⇔ *tout de suite*

〔注〕図式化の一つの約束として主動詞（動詞述辞）を不定形で示すことにする。
主辞は自立した名詞（または代名詞強勢形）で示すことにする。

(b) Je lui ai demandé ⁽¹⁾ de partir ⁽²⁾ tout de suite.

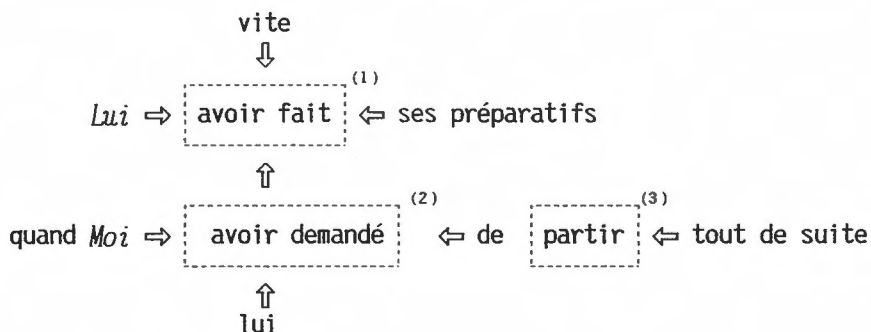
「私は彼にすぐさま出発する⁽²⁾ よう頼んだ⁽¹⁾」

文 (a) では文の核であった要素 (part⁽¹⁾) が、この文では核に従属する要素 (partir⁽²⁾) としてあらわれる:

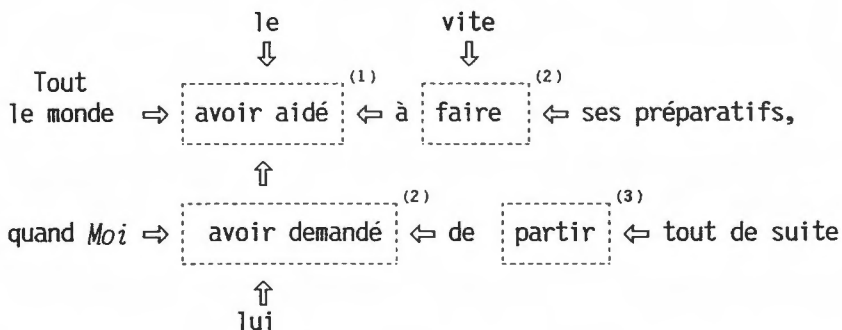


- (c) Il a vite fait⁽¹⁾ ses préparatifs,
 quand je lui ai demandé⁽²⁾ de partir⁽³⁾ tout de suite.
 「私が彼にすぐさま出発する⁽³⁾ よう頼んだ⁽²⁾ とき、
 彼はすばやく準備をした⁽¹⁾」

最初の文 (a) では文の核であった要素 (part⁽¹⁾) がこの文では更に、従属節の核の従属部分としてあらわれる (partir⁽³⁾) :



- (d) Tout le monde l'a aidé⁽¹⁾ à faire⁽²⁾ vite ses préparatifs,
 quand je lui ai demandé⁽³⁾ de partir⁽⁴⁾ tout de suite.
 「私が彼にすぐさま出発する⁽⁴⁾ よう頼んだ⁽³⁾ とき、
 彼がすばやく準備する⁽²⁾ のを皆が彼を手伝った⁽¹⁾」



統辞行動が文に加われば加わるほど、文には新たな内容が加わる。その結果、言表は複雑を増す。この複雑さは文の核からの距離ではかられる。だが話者は、文構成要素に関しては一般に、どの距離でも同じパラディグムの中からの選択を許されている。そこには統辞行動を支える経済性が窺われよう。

4. 品詞と「語」：

4-1. 統辞関係と自由で一般的な結合能力：

文を構成する要素と要素の関係は、これまで様々な解釈を許してきたが、それを捉える最も基本的な視点は両者の自由で、一般的な結合能力であろう。両者の自由で、一般的な結合能力がなければ、二つの間に結合の固定化が進行していると見なくてはならない。その際、要素の大きさ、形状の複雑さに騙されることは禁物である。逆に、要素がどんなに小さくとも、要素と要素の間に自由で、一般的な結合能力があれば、そこに自由な統辞結合が維持されていると見なくてはならない。この原則を貫徹するなら、従来の品詞論が「語」として区切ってきた名詞+「格」語尾、動詞+「時制」+「人称・数」語尾は自由な統辞結合の例として切り離されなくてはならない。

その原則をともに、さき程見た<選択できる>限定関係に戻るならば(§2)、当然、「料理+を」「太郎+が」や *vive + ment* は<選択できる>限定関係の例であることが確認できるし、また従来、「品詞」とは決して見做されなかった「格」語尾、「時制」、「人称・数」語尾はれっきとした統辞要素として分析されなくてはならない。

4-2. 「付属形式」：

勿論、形態的に特徴の少ない小辞を、文法が、独立した辞項として提示することは、それなりに煩わしさを伴う。従って文法の一覧表では、「格」語尾や、「時制」+「人称・数」語尾を核につないだ形で提示するのがよいが、この点については理論家たるもの、あまり無原則な振る舞いは慎むべきだろう。

そこで二点について簡単に見て置きたい。

一つは文法の一覧表と真正の統辞分析のレベルの差の問題である。もう一つは、言語使用者がその言語使用においてこれらの小辞をどのような文脈で認定しているか、の問題である。言うまでもなく、文法の一覧表と真正の統辞分析とは全く異なったレベルに属する。しかし言語使用者がその言語使用においてこれらの小辞をどのような文脈で認定しているかは、補足的ではあるが真正の統辞分析が考慮に入れなくてはならない要素である。「格」語尾や、「時制」+「人称・数」語尾のような小辞がいずれの場合も、それが結合する語彙核を根拠に認定されていることは疑いがない。

問題は、真正の統辞分析においては、これらの小辞を支える語彙核が、あくまでも<文

脈>に外ならないという点であろう。文法の一覧表でも真正の統辞分析でも、これらの小辞には同じように語彙核がついてまわるにせよ、語彙核の支えがもつ意味は全く異なる。その意味では、<文脈>に過ぎないこの語彙核を中心に据えて、本来中心であるべき小辞を、語彙核の「付属形式」とすることは本末転倒であると非難されて当然であろう。

小辞を「付属形式」とすることは、当然、付属形式を付属せしめている本体を軸に構えた形態論的な捉え方が底にある。それは *sémantème + morphème* 枠 (Vendryes) に外ならない。だがこの形態論的な捉え方では、話者の統辞行動が、話者が結果として選択した形態の陰に隠れて見えなくなりがちである。そのあたりにも再考すべきものがあるだろう。

5. 人間の言語と品詞の区分：

5-1. 一般的に「品詞」を論ずる：

人間の言語についていささか思い巡らして見るだけで、どの言語も、私たちが通常「品詞」という概念で言い表している区別を必ず持つことになるだろうが、しかし一方、どのような種類の「品詞」を実際に持つことになるかは決して予測は出来ないだろう、という事に気付く。

従って一般的な地平で論じる事ができるのは、あるいは一般的な地平で論じなくてはならないのは、どの言語に必ず存在する品詞の「区別」であって、言語にどのような「品詞が必ずあるか」ではないことになる。注意しなくてはならないが、当然このような議論は一般的にとらえられた言語を、あるべき決まった幾つかの品詞に還元する議論ではあり得ない。その代わりに、言語に必ず存在する品詞の「区別」を論ずるということは、大変よく似てはいるが、「品詞」を論ずることではなく「品詞論」を越えて言語の特性を論ずることに帰着する。

5-2. 表意単位の *variétés*：

もし総ての表意単位が<品詞>区分なしに用いられるとすれば、その言語には厳密な意味での文法、統辞論が存在しないことになる。総ての単位が、結局、自由な<文>信号であるからだ。厳密には<文>信号と<要素>信号のはっきりしたけじめがなくなるというべきであろう。だが、もし総ての<要素>信号が特に述辞型でもなく、特に名詞型でもなく、特に機能指示型でもないとしたら、文のモデルもなく、同じことだが構文型もない。そのような言語では、「いつ行く？」－「明日」のような省略文を通常の文から区別する明確な基準もない。結局、総ての<要素>信号が<文>信号に混じり合い、総ての<文>信号が<要素>信号に混じり合うことになるだろう。勿論、「本（があります）」と「机（があります）」と「上に（存在します）」があれば、三つの<文>信号で「机の上に本（があります）」は言える。もっとも、それが「本の上に机（があります）」と紛れないよう

にする決定的な方法はない筈である。

このように、全く継ぎ目のない言語がどのように不都合かについては、昨年の『言語研究 III』で、多少、論じた (cf. 「統辞関係と選択」 § I)。

それがどんなに経済的に大変な体系であっても、人間社会は一度自分の言語を持ち始めたら、それをそのまま、いつまでも持ち続けるだろうか？機能言語学のこれまでの探究の結果から見て、どうもそうは思えない。恐らくその言語の使用者は何らかの<品詞>区分を設けることの方に向かって進んで行くに違いない。

だが、人間の言語に可能なく品詞>区分の型は相当に分散している。動詞／名詞の対立がない言語もあり得る。構文型についても少なくとも accusative 型があり ergative 型がある。私たちはまだ、人間の言語について十分な知識をもっているとはとても言えないが、少なくとも、性急な単純化が危険であるということが身に染みて理解できる程度には、人間の言語を知り始めたといえるだろう。

6. 結論：

6-1. 無標の統辞性：

表現を通じて私たちは意味と、意味の容器を操作する。注意しなくてはならないのはこの意味内容にはそれ自身の姿を良くも悪くもそのまま写す固有の鏡があるわけではないということである。これがこの論考の基本的な視点であると言ってよい。

私たちは意味内容を、自分の選んだ様々なく表現>に写してとらえることしかできない。それは認識行為を、様々な、表現のメディアで扱う場合と全く同じである。ここでも私たちは自分たちの認識行為をその本来の絶対値でとらえることは出来ない。この例から判るように私たちの精神活動にはそれを写す固有の陰画紙がない。必然的に、私たちが選んださまざまな表現>メディアを鏡として、そこに自分の姿を写し出さなくてはならない。

具体的に問題を見てみよう。例えば私たちの表現意図がさまざまな可能性の中で「家をさがす」chercher une maison というような統辞モデルに出会い、そこで一つの名詞と出会ったその時に、名詞パラディグムの中の一項である maison 「家」に私たちの表現意図が姿を写すことになる。それが名詞的な意味であり、その表現形式が<名詞>である。こうして意味内容もまた、客観的な容器の中で形成される。だからそれが成就するのは一つの名詞を選ぶのと同じである。最初から名詞的な意味内容が存在するわけではないのである。

では名詞とは何だったのか。私たちの表現意図が出会ったその表意単位、語彙が、統辞レベルで、一定の結合形式にそって動くものだったということである。例えば、この場合についていえば動詞 chercher の目的辞の位置にそれは現れ、動詞そのものに、その要素の機能（文中での役割）を示してもらう事になる。動詞そのものにその機能（文中での役

割)を示してもらう場合、その要素自身に、予め決まった重い働きが課せられていない方が好都合である。一般に名詞といわれているものは、そのように文中での役割を何らかの他の要素に示してもらうことができる要素である。私たちが名詞的な一つの意味から<出発>して、<次に>それをマークしてくれる名詞を選ぶ、というわけではない。名詞的表現をするということは、逆に、さまざまな統辞モデルの中から「家をさがす」chercher une maison というような統辞モデルに出会ったとき、その中で、私たちの表現意図を実現させてくれる名詞に、内容を託す気になったということに外ならない。品詞は、これから選ぶものではなく、たまたま表現意図実現の容器になった要素の性格である。この容器は別の言い方をすれば一つの語彙であるが、もう一つ別の言い方をすれば、動詞の目的辞や主辞の位置に出てくる、あるいは前置詞の後ろの位置に出てくる、そういう性格の表意単位(品詞)であったということである。

品詞は、表意単位を、それが文脈の中で現れる位置などを通じて統辞的に拘束する性格である。私たちのいわば無性格な表現意図がそこで初めて形をとり、実現する場である。私たちが選んで表意単位に加えるマークではない。

以上の考察では、言語活動において、先ず言語の使用者が名詞的なあるいは動詞的な意味を思い浮かべ、しかる後に名詞あるいは動詞のパラディグムから一つを選びだす、という捉え方をしなかった。私たちにとっては、品詞とはある統辞的な結合性を示しはするが、それは使用者が<マークとして選べない>結合性である。だから品詞はたしかに統辞的カテゴリーを示しはするが、それは話者がある気に入った文脈で語彙を選ぶときの、その選択行為そのものが示す統辞性に外ならない。

6-2. ことばという鏡:

品詞の区別は私たちの言語行動のもつ、いわば<無標の統辞性>をあらわす。このことを通じて私たちはことばのある重要な性格に気付くことになる。私たちの表現行為は、さまざまな統辞モデルの中からたまたま「家をさがす」chercher une maison というような統辞モデルに出会ったとき、その中で、私たちの表現意図を実現させてくれる名詞に、内容を託す気になったときに成立する。ことばという鏡はそうようにして私たちを写し出す。私たちが微かながら自分を対象化できるのは、ことばというところの鏡があるからである。その鏡を、はっきりとは自覚できない深い淵の中、覗き込むことすらできない深い淵の中に、ことばの選択の母体、パラディグムとしてもっている。さまざまな統辞モデルの中に姿をあらわすのはそのような鏡であろう。人は例外なく、そのような選択の母体をもっている。このパラディグムは異なった人ともわけもたれている。それが人間存在のしるしであると言ってもよい。そこから選ばれたことばは鏡のように人のところを映して、人のところを支える。だが、そこで選ばれたことば、いや、そのことばが選ばれる深淵そのものが、決して公平な鏡ではなく、ある歪みをもった反射鏡であるとしたら、そして私たちが

その反射鏡をもう一度、母語として選び直すことは出来ず、自分が使用している反射鏡にすべてを委ねる以外に道がないとしたらどうだろう？私たちの自分の認識、世界の認識は、必ずその表現において歪まなくてはならない。もし、認識にそれをとらえる陰画紙がなく必然的に認識は＜表現＞の中に自分の姿を写し出さなくてはならないとしたら、私たちの自分の認識、世界の認識は、ある歪みをもった反射鏡に映った＜姿＞そのものでしか、あり得ないことになろう。だからこそ、その表現メディアにつきものの固有の歪みを、絶えず問題にすべきである。この歪みこそ、私たち自身が無意識に生み出している偏見であり差別意識であり、また私たちが育った社会の、偏見であり差別意識である。

ことばは私たちを幼児のころから、その地域で通用している形式に合わせて造りなおしている。私たちがことばの中に私たち自身を見出すことが出来るのは、私たちの無意識の世界がそのようにしてつくられているからだ。こうして、私たちが使うことばの中には、私たちの世界そのものもある。同時にまた、私たちの世界を地域共通の形式に铸直す、ある合鍵も含まれている。これは大変に重い事実である。ことばは、敢えて言うなら、私たちの無意識の世界に焼きゴテを当て、鞭打ち、形づくり、変えていくものであるといつてよい。だから私たちには、人間が自分の用いることばにどのように慣らされているのか、その辺りの事情を詳しく知ることが欠かせないだろう。

Bibliographie

- MARTINET, A., *Éléments de linguistique générale*, Armand Collin, 1960, Nouvelle édition remaniée et mise à jour 1980.
- "De quelques unités significatives", 1974. Reproduit dans *Studies in Functional Syntax*, Munich, W. Finck. 1975.
- *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier, 1979.
- *Syntaxe générale*, Armand collin, 1985.

1. Introduction

La syntaxe permet de dépasser le décalage qu'il y a entre la complexité de l'expérience à transmettre et la linéarité du langage. L'expérience est transmise par un ensemble de phrases, et du point de vue relationnel, ce sont les fonctions syntaxiques qui constituent une phrase. Mais une fonction syntaxique donnée, fonction objet, par exemple, n'est pas assumée par toutes les unités minimales significatives. Elle n'est pas assumée, non plus, par toutes les classes d'unités.

Les deux facteurs fondamentaux sont en syntaxe les fonctions syntaxiques et les classes d'unités. Dans cet article, nous nous proposons de jeter un coup d'œil aux liens qu'il y a entre fonctions et classes, et ensuite d'examiner la présence ou l'absence d'une capacité combinatoire — combinabilité positive de détermination, et enfin d'essayer d'identifier une classe d'éléments qui sont dénués de cette combinabilité.

2. Combinabilités de monèmes et fonctions syntaxiques

Une phrase est constituée par un ensemble d'unités minimales significatives et aussi par un ensemble de relations qui relient ces unités. Les unités en question sont appelées monèmes et les relations, fonctions syntaxiques. Les unités sont traditionnellement classées selon ce qu'on appelle parties du discours et les fonctions sont aussi classées de différentes manières. Ce qui n'est pas toujours clair, ce sont les liens qu'il y a entre parties du discours et fonctions syntaxiques. Car, très souvent, les unes et les autres sont définies sémantiquement. Citons d'abord deux définitions d'une partie du discours, les noms, par exemple.

"Le nom ou substantif est le mot est le mot qui sert à désigner, à 'nommer' les êtres animés et les choses; parmi ces dernières, on range, en grammaire, non seulement les objets, mais encore les actions, les sentiments, les qualités, les idées, les abstractions, les phénomènes,

etc.:(...)." (M.Grevisse, Le Bon usage, 1980, 11e éd., p.223)

"Le nom ou substantif est un mot qui est porteur d'un genre (...), qui est susceptible de varier en nombre (...), parfois en genre (...), qui, dans la phrase, est accompagné ordinairement d'un déterminant, éventuellement d'une épithète. Il est apte à servir de sujet, d'attribut, d'aposition, de complément." (M.Grevisse, Le Bon usage, 1986, 12e éd., refondue par A.Goosse, p.749)

Dans la première définition, le nom est qualifié purement sémantiquement, par l'énumération de ce que désigne le nom. Dans la seconde, pourtant, il est défini formellement et fonctionnellement, bien que les formes et les fonctions restent à déterminer. Citons, de la même manière, les définitions d'une fonction syntaxique, le complément d'objet direct, par exemple.

"Le complément d'objet énonce la personne ou la chose sur laquelle passe l'action du sujet; cette personne ou cette chose est présentée comme supportant l'action, comme étant l'objet de l'action, comme marquant l'aboutissement, l'achèvement du procès: (...).

Le complément d'objet est direct ou indirect.

Les expressions complément direct, complément indirect ont rapport non à la nature du complément, mais simplement à sa construction. Un complément est direct quand il se rattache directement, c'est-à-dire sans mot-outil, au mot complété; (...)." (Op.cit., 1980, p.184)

"Le complément d'objet est un complément essentiel (...), non adverbial (...).

Selon qu'il est introduit ou non par une préposition, il est appelé direct ou indirect. (...)" (Op.cit., 1986, p.412)

Dans l'édition de 1980, Grevisse définit le complément d'objet de la même manière que le nom, en énumérant ce qu'indique le complément d'objet. Dans l'édition de 1986, Goosse le définit en utilisant le terme "complément" et il n'énumère pas ce qu'indique le complément d'objet. Bien sûr, le terme "complément" reste à définir. Concernant la qualification "direct", leurs définitions sont identiques, "direct" concernant l'aspect formel du complément en question.

C'est bien sûr de la seconde définition par A.Goosse que nous sommes proche

tant pour le nom, partie du discours que pour le complément d'objet direct, fonction syntaxique, parce qu'il est impossible de définir sémantiquement les habitudes combinatoires linéairement réalisées des unités minimales significatives, en énumérant ce qu'indiquent les unités d'un groupe, en énumérant les contenus extralinguistiques, et qu'il est encore plus difficile, voire impossible, de qualifier les relations organisatrices formelles de phrases en énumérant les contenus des éléments entre lesquels se réalisent les relations en question.

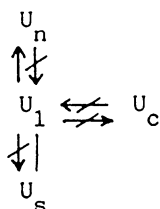
Tout d'abord, nous préférons le terme "classe" à celui de "partie du discours". Une classe est définie par sa combinabilité. La combinabilité est un ensemble d'habitudes combinatoires.

Nous supposons que les unités minimales significatives doivent être groupées selon leurs habitudes combinatoires et que la distinction des unités selon leurs habitudes est indispensable pour que nous puissions dépasser le décalage qu'il y a entre la linéarité du langage et l'expérience non linéaire à transmettre. Pour que soit possible la reconstruction des liens existant entre les éléments de l'expérience non linéaire, il faut tout d'abord que les unités qui sont nombreuses et qu'on réalise linéairement se répartissent en un petit nombre de groupes combinatoirement spécifiés. La répartition des unités selon les habitudes combinatoires n'est pas grand-chose par rapport à ce qu'impose la linéarité, mais c'est une spécification importante de la part des facteurs du sens des unités. Les combinabilités sont, bien que générales, des spécifications des signifiés des unités qui composent des énoncés. Ces spécifications ne sont bien sûr pas suffisantes pour la reconstruction d'une expérience dans la linéarité et il faut d'autres mécanismes pour bien l'effectuer. Mais elles sont un début de l'organisation syntaxique. Remarquons bien qu'il n'est pas du tout contradictoire de dire que spécifications des signifiés des unités sont un début d'organisation syntaxique.

Examinons en détail la combinabilité d'un monème et celle d'une classe de monèmes.

Nous citons ce que résume M.Mahmoudian à propos des latitudes combinatoires.

" Nous pouvons maintenant compléter le schéma (...) en y introduisant les rapports d'implication:



Les latitudes combinatoires de l'unité U_1 seront connues dès qu'on en connaîtra:

- les latitudes fonctionnelles: l'ensemble des rapports possibles entre l'unité U_1 et ses noyaux potentiels U_n (rapports de U_1 à U_n);
- les latitudes coordinatives: les différents types de lien possibles entre l'unité U_1 et ses éventuels coordonnés U_c ;
- les latitudes subordinatoires: l'ensemble des rapports possibles entre l'unité U_1 et ses éventuels subordonnés U_s ."

(M.Mahmoudian (dir.), Pour enseigner le français, 1976, p.86)

Dans Paul travaille le bois et le fer, par exemple, comment peut-on identifier les latitudes combinatoires de bois? Ce sera l'ensemble des faits suivants: le rapport de subordination qu'il a avec travaille, le fait que fer est coordonné à bois et le fait que le détermine bois. Du point de vue de la hiérarchisation syntaxique c'est le rapport de subordination qui importe le plus. Mais il ne faut pas oublier qu'une unité donnée peut être expansion en même temps que noyau et qu'il y a deux sortes d'expansions, celles par subordination et celles par coordination. Et c'est l'ensemble de ces faits combinatoires qui constituent des énoncés. Et bien entendu tous ces faits font partie des combinabilités.

Concernant les liens entre classes (=combinabilités) et fonctions syntaxiques, il faut bien remarquer que dans l'exemple, ci-dessus, la relation de subordination qu'a bois par rapport à travaille est sa fonction mais que ce n'est pas seulement cette fonction qui constitue la combinabilité de bois. Les fonctions font partie des combinabilités, mais inversement il faut aussi remarquer que les combinabilités soutiennent les fonctions syntaxiques: dans l'exemple donné ci-dessus, ce ne sont pas toutes les classes de monèmes qui peuvent assumer la fonction de bois.

En fait, il est inexact de parler de combinabilité de bois. Une combinabilité caractérise une classe de monèmes. La combinabilité de la classe nominale, par exemple, est l'ensemble des faits combinatoires (dont ceux de bois,

ci-dessus) des éléments nominaux. Ou inversement il faut pouvoir présenter les faits combinatoires communs à ceux qu'on veut qualifier de noms: le fait d'être déterminé par le, la, les, un, etc., le fait de pouvoir assumer la fonction du sujet d'un verbe, etc. (Le fait combinatoire minimal commun à tous les éléments nominaux serait la détermination par une des modalités nominales — il resterait alors à définir combinatoirement les modalités nominales — mais remarquons qu'il est loin d'être facile d'identifier toutes les combinatoires caractéristiques communes des éléments que nous voulons appeler noms.)

Et on parle de la fonction objet direct de bois dans Paul travaille le bois et le fer. Mais il s'agit là de la fonction représentée par une relation existant entre travaille et bois, car la fonction syntaxique est une relation qui s'organise entre deux classes d'unités minimales significatives. Dans l'exemple en question, il faut dire que la fonction objet est la relation qu'a l'ensemble d'éléments nominaux (dont bois) par rapport à l'ensemble de verbes transitifs (dont travaille). Tous les verbes transitifs n'organisent pas des énoncés de la même manière (comparer travailler le bois et donner ce livre à Paul, par exemple) et tous les noms ne se comportent pas identiquement. Donc quand on accepte de recourir aux classes, il faudrait presque inévitablement prévoir la nécessité de sous-classes, car les faits fonctionnels et combinatoires réels sont ainsi complexes.

Les fonctions syntaxiques sont principalement des relations de subordinations qu'ont les expansions par rapport à leur noyau prédicatif. Et les combinabilités concernent tous les faits combinatoires. Les fonctions contribuent directement à la construction de phrases, tandis que les combinabilités n'y servent qu'indirectement, à travers les constituants d'énoncés et en caractérisant combinatoirement les éléments assumant des fonctions syntaxiques. On voit bien que les fonctions et les combinabilités concernent toutes deux l'aspect relationnel et formel de la construction d'énoncés et que les deux se soutiennent réciproquement.

3. Autonomie et positionnalité

C'est par la hiérarchisation de rapports que les unités significatives linéaires arrivent à reconstruire les rapports existant entre les éléments de l'expérience extralinguistique. C'est donc le rapport de subordination qui est la clef de l'organisation syntaxique. Or l'essentiel du rapport de subordination correspond à la notion d'autonomie syntaxique selon A.Martinet et à celle de combinabilité positive de détermination selon nous qui sommes

inspiré par ce linguiste.

Les éléments dont les rapports avec le reste de l'énoncé sont indiqués sont qualifiés d'autonomes. Dans Marie écrira bien pour le grand public, par exemple, la préposition pour indique le rapport qu'a le grand public avec le reste de l'énoncé (le reste étant représenté par écrira). Mais le rapport de bien et celui de -ra avec le reste de l'énoncé sont aussi indiqués, non pas par un segment spécifié, mais par leurs signifiés; c'est dans leurs signifiés mêmes que sont impliqués leurs rapports avec le reste de l'énoncé. L'élément -ra ne détermine que la classe verbale, tandis que bien est subordonné à plusieurs différentes classes de monèmes. Il n'est pas sans raison de distinguer les éléments comme -ra de ceux comme bien et de les mettre à part pour les appeler modalités verbales (il y a aussi des modalités nominales comme le, ce, etc.). Et du point de vue de l'organisation syntaxique souple, il est intéressant de mettre l'accent sur les éléments qui peuvent déterminer plusieurs différentes classes et dont les signifiés impliquent leurs rapports de détermination avec le reste de l'énoncé, et de les qualifier d'autonomes. De ce point de vue-ci, on peut dire que les syntagmes comme pour le grand public sont autonomisés. C'est bien sûr l'autonomie qui est commune aux éléments autonomes et aux syntagmes autonomisés.

Mais remarquons bien qu'il y a quelque chose de commun à -ra, bien et pour le grand public. C'est le fait que leurs signifiés impliquent tous positivement leur rapport avec le reste de l'énoncé, c'est-à-dire, leur rapport de subordination avec leur noyau. On peut dire qu'ils ont tous une combinabilité positive de détermination. Martinet même reconnaît que la différence entre les autonomes et les modalités importe moins que leur caractéristique commune (cf. A.Martinet, Eléments de linguistique générale, postface de juin 1973, 1976, p.208).

Dans l'énoncé donné ci-dessus, c'est Marie qui n'a pas de combinabilité positive de détermination en question. Son rapport avec le reste de l'énoncé n'est pas indiqué positivement. Son signifié même n'implique aucun rapport de subordination avec le reste de l'énoncé. Ce qui est à remarquer, c'est que l'élément verbal "écrire" contenu dans écrira, non plus, n'a pas la combinabilité en question. Le verbe "écrire" est déterminé par tous les autres éléments (y compris Marie) mais son rapport avec le reste de l'énoncé n'est pas positivement indiqué, que ce soit par un indicateur spécialisé ou par son signifié. Il y a donc des éléments qui n'ont pas de combinabilité positive de détermination, et on peut les appeler positionnels.

Leur combinatoire commune peut être appelée positionnalité.

La distinction entre l'autonomie (ou plus précisément la présence d'une combinabilité positive de détermination) et la positionnalité est essentielle dans l'organisation syntaxique. Dans 2., nous avons dit que la présence des habitudes combinatoires, c'est-à-dire, combinabilités, est une spécialisation indispensable du facteur "sens" en face de la linéarité. Pour la reconstruction des rapports non linéaires dans la linéarité il faut que les unités significatives soient réparties en différentes classes selon leurs différentes combinabilités. Et nous avançons ici une deuxième spécialisation du facteur "sens": celle par l'autonomie, ou plus exactement, par la combinabilité positive de détermination. Il est important qu'il y ait une spécialisation de combinabilité positive d'être subordonné aux autres éléments. C'est la spécialisation des rapports pour la hiérarchisation sans laquelle le dépassement de la linéarité serait difficile, voir impossible.

Il est maintenant question de savoir comment on peut identifier concrètement les autonomes et les positionnels.

4. Syntagmes nominaux, verbes et dépendants positionnels

Les notions de syntagme nominal et de syntagme verbal sont souvent et partout utilisées dans les analyses syntaxiques. On rencontre, par exemple, la représentation d'une phrase par la concaténation des syntagmes nominal et verbal: Sn - SV. Et là SN indique non seulement un syntagme nominal mais aussi sa fonction sujet. Et remarquons surtout que la fonction sujet n'est pas nécessairement assumée par un nominal. Et SV, de la même manière, implique aussi sa fonction prédicative.

On peut comprendre que dans ce genre de représentation c'est quelque chose comme nos dépendants positionnels qu'indique SN. Les éléments comme les nominaux, puisqu'ils n'impliquent aucune combinabilité positive de détermination, dépendent souvent de leurs positions relatives dans l'énoncé (ou plus exactement, de leurs positions par rapport à leurs noyaux): dans Pierre aime Marie, ce sont les positions relatives de Pierre et de Marie par rapport à leur noyau aime qui indiquent leurs fonctions sujet et objet. Mais cela n'implique pas que les positions des positionnels soient toujours pertinentes: dans Ainsi parlait Zarathoustra, par exemple, la fonction sujet de Zarathoustra est bien identifiable malgré sa position à droite du prédicat.

Une phrase sera schématisée, selon nous, donc, par: Positionnel - Vt (=verbe fini, avec "t" comme temps). Mais puisque les verbes sont des positionnels et que le temps n'est qu'une modalité verbale (=expansion), le schéma

minimal sera, plus exactement: Positionnel - Positionnel. A ce niveau général, ce schéma signifie qu'il faut au moins deux positionnels pour qu'il y ait une phrase en français. Si on arrive à reconnaître que le premier positionnel est une expansion du second, c'est au niveau où on distingue les nominaux et les verbaux à l'intérieur de la classe des positionnels (mais attention à ce que le premier positionnel n'est pas toujours nominal; voir ci-dessous). Fonctionnellement, le schéma d'une phrase sera : Sujet - Prédicat. Et formellement, puisque dans les phrases verbales — ce qui est souvent le cas en français — le prédicat ne peut être qu'un verbe et que le sujet n'est pas nécessairement un nominal, nous préférons, au schéma: SN - SV, celui de : Positionnel - V(ou Positionnel - Vt). Dans le schéma: Positionnel - V, "Positionnel" est nécessairement le sujet, et "V", le prédicat. Dans la suite: N - V, par exemple, "N" est nécessairement le sujet et "V" nécessairement, le prédicat, bien que les deux sont également positionnels. Les nominaux et les verbaux sont identiques en ce qu'ils sont positionnels, mais leurs combinabilités sont distinctes de telle sorte que s'il n'y a qu'un nominal et un verbe dans une phrase verbale, c'est nécessairement le nominal qui est organisé par le verbe. Dans le schéma: Positionnel - V, que se passe-t-il quand "Positionnel" est un verbe, soit dans: V - V ? Dans ce cas, c'est nécessairement le premier "V" qui assume la fonction sujet (cf. voir ci-dessous).

Selon notre analyse, l'identification de la positionnalité doit être fondée sur la fonction sujet en français. Parmi les constituants de la phrase, la plupart sont munis d'une combinabilité positive de détermination: ils sont autonomes, autonomisés et modalités. Le reste est positionnel. Et les positionnels peuvent être définis comme les constituants qui peuvent assumer la fonction sujet d'un verbe quelconque (mais voir les précisions, ci-dessous), le sujet étant défini comme le premier complément indispensable au prédicat pour qu'il y ait une phrase. Remarquons que le paradigme des éléments dits objets directs n'est pas fiable: dans Pierre bat Paul, le paradigme de Paul ne contient certes que les positionnels, mais comment peut-on traiter à parler français dans Pierre apprend à parler français (cf. Pierre apprend le français)?

Enumérons les positionnels que nous avons pu identifier en français.

(1) Les éléments nominaux: dans Pierre bat Paul, Pierre qui assume la fonction sujet est un positionnel. La pertinence de la position de ce genre de positionnels peut être démontrée autour d'une sous-classe de verbes transitifs dont battre: Paul bat Pierre.

(2) Les syntagmes avec un verbe fini: dans Qu'il ne travaille pas ne fait aucun doute, Qu'il ne travaille pas, sujet de fait est un positionnel. Rigoureusement parlant, ce n'est pas un syntagme mais un monème qui assume une fonction. C'est donc travaille, noyau du syntagme en question, qui assume la fonction sujet de fait. L'exemple donné sera donc schématisé comme: V - V - N, où le premier V est le sujet, le second V, le prédicat, le N, l'objet. Qu' n'est pas un indicateur fonctionnel, parce qu'il ne fournit aucune combinabilité positive de détermination au verbe travaille (du moins dans ce contexte). Dans Qu'il ne travaille pas explique qu'il échoue à l'examen, le que en question n'indique ni la fonction sujet ni celle d'objet: cf. Qu'il échoue à l'examen explique qu'il ne travaille pas.

Dans Qu'il ne travaille pas ne fait aucun doute, rappelons bien que c'est travaille qui est un positionnel. Les verbes sont bien positionnels mais ils sont bien distincts des noms qui sont aussi positionnels. Le que en question qui n'offre aucune combinabilité positive de détermination peut être qualifié de positionnalisateur: comparer avec de de avant de partir - avant cela.

(3) Les infinitifs: dans T'entendre est un plaisir, entendre est un positionnel. Entendre peut être analysé en verbe "entendre" et élément infinitif, et il sera symbolisé comme : V_{inf} . et ce "inf" ne fournit aucune combinabilité positive de détermination. Il peut aussi être qualifié de positionnalisateur.

(4) Les syntagmes de- V_{inf} : dans D'avoir connu la joie ne me laissait pas du bonheur, D'avoir connu la joie, qui est le sujet de laissait, est un positionnel. Dans Pierre décide de partir, on peut reconnaître que de partir est un positionnel. Mais ce n'est pas seulement parce que le paradigme de de partir contient un positionnel indiscutable, cela, par exemple. C'est qu'en plus, de partir peut assumer la fonction sujet d'au moins un prédicat verbal (remarquons que de partir peut difficilement être le sujet de décider). La préposition de en question peut être considérée comme un positionnalisateur.

(5) Les syntagmes en que. Si les syntagmes en que sont positionnels, cela revient finalement à identifier leurs noyaux verbaux comme positionnels: cf. (2). Mais dans Pierre s'attend qu'elle vienne le voir, qu'elle vienne le voir ne fonctionne pas comme un positionnel, car le paradigme de ce syntagme contient la préposition à: Pierre s'attend à cela. A cela n'assume le sujet d'aucun verbe. Pour l'identification de la positionnalité d'une expansion autre que le sujet, il faut d'abord voir si ou non son paradigme contient

un nominal indiscutablement positionnel, cela, par exemple, et ensuite il faut vérifier si ou non l'expansion en question peut assumer la fonction sujet d'un verbe quelconque. Précisons ici que pouvoir assumer la fonction sujet d'un prédicat verbal n'est pas suffisant pour identifier la positionnalité. (Il en va de même pour les infinitifs et les infinitifs avec de : Pierre vient me voir et Ça dépend de partir.)

(6) Les syntagmes en discours direct: dans Il lui dit: "J'ai mangé ton chien.", "J'ai mangé ton chien." est un positionnel, parce que cette partie en discours direct peut être remplacée par cela et elle peut être la fonction sujet du verbe signifier, par exemple: "J'ai mangé ton chien" signifie ... En principe, on peut mettre toutes sortes d'éléments dans la forme de discours direct.

(7) Les syntagmes en discours indirect: dans Je me demande s'il est français, s'il est français est un positionnel, car Je me demande cela est acceptable et le syntagme en si peut assumer la fonction sujet: S'il est français ou belge est une question. Mais remarquons que beaucoup de syntagmes en discours indirect peuvent difficilement assumer la fonction sujet d'un verbe.

Si nous fondons la positionnalité sur la fonction sujet d'un verbe quelconque, c'est bien sûr notre hypothèse dans l'analyse du français. Le paradigme du sujet est beaucoup plus solidement établi et cohérent que celui de la fonction objet. Répétons ici que concernant les éléments qui semblent assumer la fonction objet, il faut qu'ils soient d'abord remplacés par un positionnel nominal indiscutable comme cela et qu'ils puissent assumer la fonction sujet d'un prédicat verbal quelconque. Dans Pierre bat Paul, par exemple, Pierre et Paul sont tous les deux positionnels, mais dans Il le bat, ni Il ni le n'est positionnel. Il et le ont une combinabilité positive de détermination. Ils ne déterminent que la classe verbale et en cela ils ressemblent aux modalités verbales. Le ne peut jamais assumer la fonction sujet. Donc il n'est pas un positionnel. Mais quant à Il, son paradigme contient des éléments indiscutablement positionnels: ce garçon, par exemple. Il assume bien sûr la fonction sujet de battre. Mais Il ne peut pas être considéré comme un positionnel, car Il est indiscutablement muni d'une combinabilité positive de détermination. On peut donc dire que les pronoms sujets atones sont des exceptions. Pour ces éléments, il faudrait imposer la troisième condition: celle de pouvoir assumer la fonction objet d'un verbe quelconque. (Bien que très rares il y a des exemples comme De là à conclure ainsi est hâtif qu'on peut difficilement traiter.)

La notion de dépendant positionnel est proposée par A.Martinet pour

l'analyse de toutes les langues. Et nous pensons que la fonction sujet permettra bien de l'identifier en français. Il faut que le critère d'identification des positionnels soit décidé pour chaque langue.

5. Conclusion

Les classes de monèmes (parties du discours) sont munies de différentes combinabilités. La répartition des monèmes en différentes classes est la spécialisation du facteur "sens" vis-à-vis de la linéarité à dépasser. Cette spécialisation aidera à reconstruire l'expérience non linéaire dans la linéarité. En plus, il y a une autre spécialisation: les monèmes et les syntagmes sont répartis en deux grandes classes, celle ayant une combinabilité positive de détermination et celle qui n'en a pas. La spécialisation de la combinabilité positive d'être subordonné aux autres éléments est importante, parce que l'essentiel de l'organisation syntaxique est la hiérarchisation.

Nous proposons de remplacer, dans la schématisation des phrases, la notion de syntagme nominal par celle de positionnels. La fonction sujet est un important critère pour identifier les positionnels. Et il faut remarquer que les nominaux et les verbes sont tous positionnels en ce qu'ils sont dénués d'une combinabilité positive de détermination. La répartition des unités significatives en différentes classes est essentielle et indispensable, mais cela n'empêche pas que deux classes distinctes aient une caractéristique combinatoire commune fondamentale: noms et verbes.

Bibliographie

- GREVISSE, Maurice : Le Bon usage, 11e éd., Gembloux, Duculot, 1980.
— : Le Bon usage, 12e éd. refondue par André GOOSSE, Gembloux, Duculot, 1986.
- MAHMOUDIAN, Mortéza (dir.): Pour enseigner le français, Paris, PUF, 1976.
- MARTINET, André : Eléments de linguistique générale, Paris, Armand Colin, 1976.
- TSURUGA, Yoichiro : L'Autonomie syntaxique en français contemporain (sa contribution à la communication linguistique), doctorat de 3e cycle, Aix-en-Provence, Université d'Aix-Marseille I, 1978.
- : "Classes et fonctions en syntaxe — noms et verbes en français contemporain", Area and Culture Studies 42, Université des Langues Etrangères de Tokyo, 1991, pp.81-93.

ドイツ語の品詞分類

在 間 進

1. ドイツ語の品詞分類にとって、屈折 (Flexion) するか否かがもっとも基本的な特徴を形成する。屈折はさらに

(イ) 人称、数、時制、法にもとづく活用 (Konjuntion)

(ロ) 性、数、格に基づく格変化 (Deklination)

に分れる。「格変化」は、複数形の形成を含むため、かならずしも適切な名称ではないと言える。

2. 活用 (Konjunktion) する語を「動詞」と分類する。活用から見た場合、人称には 1・2・3 人称の 3 種類が、数には単数と複数の 2 種類が、時制には現在、過去の 2 種類が、法には直説法、接続法、命令法の 3 種類がある。接続法にはさらに 1 式、2 式の 2 種類がある。

	法	時制	数	人称
(ich) gehe	直説法	現在	単数	1 人称
(er) geht	---	---	---	3 人称
(ihr) geht	---	---	複数	2 人称
(ich) ging	---	過去	単数	1 人称
(er) ging	---	---	---	3 人称
(ihr) gingt	---	---	複数	2 人称
(ich) gehe	接続法 (1 式)	現在	単数	1 人称
(er) gehe	---	---	---	3 人称
(ihr) gehet	---	---	複数	2 人称
(ich) ginge	接続法 (2 式)	現在	単数	1 人称
(er) ginge	---	---	---	3 人称
(ihr) ginget	---	---	複数	2 人称

なお、動詞は、統語的な自立性から本動詞と話法の助動詞とに分けられる。他の動詞と結びつかず、単独でも述部を構成できる動詞を本動詞と呼ぶのに対し、不定形の動詞と結びつき、活用形を作る助けをしたり、様々な意味合いを付加したりする

動詞を助動詞と呼ぶ。次例の太字の部分为本動詞、下線部が助動詞である。

Er wird morgen kommen.

Er hat ein Buch gekauft.

Der Schüler wird vom Lehrer gelobt.

Ich muß noch einen Brief schreiben.

また、助動詞は、時制や受動態の形成に関与する助動詞 (haben/sein/werden) と話法の助動詞 (dürfen/können/mögen/müssen/sollen/wollen) に大別できる。

3. 活用しない語は、格変化するか否かによって二大区分される。格変化する語はさらに、文法上の性を内在的に持つか否かによって「名詞」とその他に区分される。名詞はかならずどれかの文法上の性を持ち(生物的性とは無関係な、事物や概念を表す名詞にも文法上の性がある)、文法上の性には、男性、女性、中性の3種類がある。

男性名詞:	Vater	父	Brief	手紙	Tisch	机
女性名詞:	Mutter	母	Wand	壁	Uhr	時計
中性名詞:	Kind	子供	Buch	本	Dach	屋根

【注】-----

文法上の性が重要な意味を持つのは、冠詞類・形容詞との呼応関係においてである。すなわち、冠詞類と付加語は文法上の性に応じた3種の形態を持つのである。

〔男性名詞〕 ein guter Vater der dicke Brief

〔女性名詞〕 eine gute Mutter die dicke Wand

〔中性名詞〕 ein gutes Kind das dicke Buch

冠詞類・付加語にとって文法上の性は、後続の名詞によって決められるものであるため、逆に、冠詞類、付加語の形態を手掛りにして名詞の文法上の性を知ることができる。

4. 格変化をし、文法上の性を内在的に持たない語の中で、名詞を修飾できるか否かによって「代名詞」とその他に区分される。代名詞は、名詞を修飾することができず、文脈・状況に依存した非自立的な語である。代名詞の本来的機能は、名詞(正確には名詞句)を代用することにある。

Da steht ein Wagen. Er gehört meinem Onkel.

Er hält das Kind hoch, damit es die Kirschen pflücken kann.

代名詞は、人称代名詞、指示代名詞、不定代名詞、疑問代名詞、関係代名詞、再帰代名詞(相互代名詞)の6種に分かれる。

5. 格変化をし、文法上の性を内在的に持たず、名詞を修飾できる語の中で、名詞とのみ共起するか否かによって「冠詞類」とその他に区分される。冠詞類は、名詞句の句頭に置かれて用いられる。付加語が名詞の前に置かれる場合、名詞句の構造はかならず冠詞類→付加語→名詞の順序になる。

冠詞類	付加語	名詞
der	alte	Mann 年老いた_____男
der	alte, reiche	Mann 年老いた金持ちの男

冠詞類は（ゼロ冠詞を含めると）名詞句にかならず必要とされる義務的要素であるが、複数の冠詞類を並列的に用いることはできない（*das mein Buch / *ein jedes Buch）。例外は *dieser* と所有冠詞の結合のみである <*diese seine Erklärung*>。また、冠詞類は名詞と性・数・格において呼応する。冠詞類は、格変化の様式に基づき、定冠詞に準じる定冠詞類と不定冠詞に準じる不定冠詞類に分かれる。

〔定冠詞類〕

der dieser jener solcher jeder mancher
aller

〔不定冠詞類〕

ein mein dein sein ihr unser
euer Ihr kein

6. 格変化をし、文法上の性を内在的に持たず、名詞を修飾し、名詞以外とも共起する語の中で、残ったものを「形容詞」と分類する。形容詞の用法は付加語的、述語的、副詞類的用法の3つに大別できる。

〔付加語的〕 *der schnelle Wagen*

〔述語的〕 *Der Wagen ist schnell.*

〔副詞類的〕 *Der Wagen fährt schnell.*

【注】 -----

形容詞には付加語的にしか用いられないもの（例文1）、述語的にしか用いられないものがある（例文2）。

(1) *das eigentliche Problem*

(*Das Problem ist eigentlich. とは言わない)

(2) *Der Teller ist entzwei.*

(*der entzweie Teller とは言わない)

7. 活用しない語の中で、格を支配するか否かで「前置詞」とその他に区分される。

前置詞は、後続の名詞に一定の格（２格か３格か４格か）を要求する。これを前置詞の格支配と呼ぶ。

〔４格〕 Sie hat einen Sinn für das Schöne.

〔３格〕 Er holt Kohlen aus dem Keller.

〔２格〕 Das liegt außerhalb seines Fachgebietes.

前置詞は原則的に名詞句の前に置かれるが、一部の前置詞は名詞句の後ろに置かれる。

Die Schule steht der Kirche gegenüber.

また、名詞と前置詞が熟語的に結合したものが前置詞的に用いられることがある：
in Bezug auf et4/im Gegensatz zu et3/mit Rücksicht auf et4。

【注】-----

前置詞は副詞と結合することがある。

Gehen Sie bitte nach rechts.

Ihr Mann stammt nicht von hier.

Ich habe die Zeitung von vorn bis hinten gelesen.

８．活用せず、格を支配しない語の中で、文肢ないし付加語として用いられるか否かによって「副詞」とその他に区分される。主な副詞は（イ）空間、（ロ）時間、（ハ）様態、（ニ）程度、（ホ）判断、（ヘ）接続などに区分される。

９．活用せず、格を支配せず、文肢ないし付加語として用いられない語の中で、文の一部として用いられるか否かによって「接続詞」とその他に区分される。接続詞は、統語的機能に基づいて、並列接続詞と従属接続詞とに分けられる。並列接続詞は、文あるいは語句を対等の関係で結び付ける接続詞である。

Er erzählt, und sie hören aufmerksam zu.

Sie schlief, er aber wachte.

Er kommt heute oder morgen an.

Er fehlt heute, denn er ist krank.

また、従属接続詞は、主文と副文を結び付ける接続詞である。副文の文頭に置かれ、副文の目印になるため、関係詞、補足疑問詞とともに導入語と呼ばれることがある。

Ich konnte nicht kommen, weil ja gestern meine Prüfung war.

Das kam, weil zu teuer, nicht in Frage.

Da er verreist war, konnte er nicht kommen.

10. 活用せず、格を支配せず、文肢ないし付加語としても文の一部としても用いられず、文に従属しないものを「感嘆詞」と分類する。

Ach, du lieber Himmel !

Oh, das ist aber lieb von dir !

ドイツ語と日本語の「名詞」の比較

在間 進

1. はじめに

本稿では、ドイツ語の Wald, Hund (略 Nd) のような、また、日本語の「森」「犬」(略 Nj) のような典型的な「名詞」を比較する。これは次ような論拠に基づく: 「名詞」の比較は品詞範ちゅうの比較である。品詞の所属性は定義によって定まるものである。したがって品詞範ちゅうの比較において抽出される分析結果はどのような定義に基づくかによって変化することになる。たとえば、ドイツ語の「名詞」は次のように定義されている。

Engel:

Nd sind die Wörter, die kein Genus-, aber ein Kasusparadigma haben.

Glinz:

Nd sind diejenigen als fallbestimmten Glieder auftretenden Wörter, die bei den mit ihnen kombinierten oder sie aufnehmenden Adjektiven und Pronomen die Wahl eines bestimmten Genus bedingen.

日本語の「名詞」はたとえば次のように定義されている。

Bloch:

Nj sind "uninflected words that occurs before the DA".

実際はしかし、定義の際に問題になるのは小さな語群(周辺の語群)であり、その品詞の大半を占める中心的語群を抽出することができる。語学教育的に重要なのはこの中心的語群である。中心的語群と周辺の語群とは共通性もあるが、相違もあるため、中心的な語群を比較するのが有効である。

Dieses Abnehmen der Trennschärfe wird auch ganz bewußt in den Blick gefaßt. Wir sind uns klar, daß sich hier offensichtlich von der Sache her, aus den Phänomenen selbst nicht immer die Abgrenzungsschärfe ergibt, die wir als Wissenschaftler gern hätte. Es gehört für uns gerade zur Wissenschaftlichkeit des Vorgehens, daß man nirgendwo eine höhere Abgrenzungsgenauigkeit postuliert, als sie in den Beobachtungsdaten eben verifizierbar ist und demgemäß in der Sache offenbar vorliegt. Wahre Genauigkeit liegt darin, daß man sich der Relativität aller Genauigkeit und der jeweils konstitutiven Unschärfe aller Abgrenzungen

klar bewußt ist.

2. ドイツ語の名詞と日本語の名詞の共通性

2. 1. 付加語によって修飾が可能

gute Milch よい ミルク

2. 2. 文肢および文肢構成素として機能する

die Mutter lieben 母親を愛する

der Hut des Vaters 父の帽子

2. 3. ドイツ語の名詞はかならず、前置詞と結びつく場合でも格を持つ。

Er ist Student. → Er ist **ein fauler Student**.

それに対して、日本語の名詞は固定的に結びついている範ちゅうはない。格助詞は任意的に削除されるだけでなく、義務的に削除される場合もある。

彼 (が) 好きです

酒 (を) も飲む

今日 (*に) 行きます

彼 (*が) は来る

次の場合には削除されたとは考えられない。

彼は医者－だ／か／よ。

2. 4. ドイツ語の名詞はかならず数と結びついている。見掛け的な中立化は様々な手段で明示される。

Da kommt **unser Lehrer**.

Da kommen **unsere Lehrer**.

2. 5. ドイツ語の名詞は文法上の性とかならず結びついている。日本語の名詞は文法上の性がない。

2. 6. ドイツ語の名詞は、格と数に応じて語尾変化する。日本語の名詞には、格語尾も固定的に結びついている形態もない。

君 と だけ 話す

君 だけ と 話す

酒 ばかり を 飲む

酒 ばかり -- 飲む

2. 7. ドイツ語では、語幹＋語尾を一語の種々の現れ方 (Wortform) と把握できる。したがって、Wort と Wortform の対立を想定することが有意義であるが、この対立は日本語の名詞には有意義ではない。形態素と語の対立が一对一であり、Portemanteau の形態がないだけではなく、その関係も単純である。

ドイツ語

日本語

1. 《文法的》

格が義務的

格・性・数の文法範疇はない

(あまり明示的でないが)

文法上の性が義務的

(他の語で明示的になる)

数が義務的

2. 《形態的》

語尾変化する

語尾変化しない

(大半は結合する語による)

Wort と Wortform の区別が有意義

独立的

3. 《統語的》

付加語によって修飾される

同

前置詞と結合

助詞と結合

付加語になる

目的語

副詞類 (2 格 4 格)

述語 (2 格)

名詞における『数』

－ 単数と複数 －

在間 進

1. ドイツ語の名詞は、文法範疇『数 (Numerus) 』と義務的に結合している。すなわち文中の名詞においてはかならずその『数』を問題にすることができる。『数』の実現形式としてドイツ語には単数と複数の2種類がある。

2. 単数形を積極的に特徴づける形態はなにもない一方、複数形を特徴づける形態 (複数語尾) は4種類ある:

- (イ) 単数同形式 : Onkel - Onkel
- (ロ) -e 式 : Hund - Hunde
- (ハ) -er 式 : Kind - Kinder
- (ニ) - [e] n 式 : Frau - Frauen 注

単数形は、複数形語尾がないということで特徴づけられる消極的形態である一方、複数語尾がゼロ (無) の語もあるため、単数と複数の区別は必ずしも常に明白というわけではない。

3. 形態的に何ら特徴づけられることのない単数に対して、上で述べた5つの異なる形態を複数というひとつの範疇にまとめるのは、『数』が原則的には名詞の指示物の「数」に関するもので、この観点から単数および複数にそれぞれ統一的な意義素を想定できるからである (呼応などにみられる統語的側面は無視する)。

4. 単数および複数の意義素は、H. Vater (1965) および國廣哲彌 (1970) にもとづき次の2点における対立によって特徴づけることが可能である。

- (イ) Gliederung
- (ロ) Vielheit

5. Gliederung とは、「同種の単体への文節 (Teilbarkeit im gleichartige Einheiten - H. Vater 1965)」のことで、この特徴によると単数と複数は次のように特徴づけられる:

Der Plural zeigt den durch das Substantiv bezeichneten Begriff als "gegliedert" an, während der Singular nichts darüber sagt, ob dieser

Begriff gegliedert ist oder nicht.

単数が Gliederung と直接関与していないことは物質名詞（たとえば Zucker）、抽象名詞（たとえば Freiheit）において明白にみてとることができよう。この Gliederung において注意すべきことが2点ある。

その1つは、Gliederung の規準になる観点が1つのものに限定できないということである。H. Vater (1965) は Gliederung における観点はどのようなものでもよいと、次のように述べている：

Bei der Gliederung als unbedingte Voraussetzung für den Plural spielt der Gesichtspunkt, nach dem gegliedert wird, keine Rolle. Bei Häuser denkt man vor allem an eine Gliederung in - gleichzeitig existierende - Gegenstände, eine räumlich geteilt. Bei Bewegungen kann sowohl eine zeitliche als auch eine räumliche Gliederung gemeint sein: nacheinander oder gleichzeitig ausgeübte Bewegungsakte. Bei Freuden kann der Plural eine Differenzierung nach Arten bezeichnen, ebenso bei Weine.

他の1つは、Gliederung が名詞の指示物の、現実界における様態であるよりも、むしろ — たとえば Bewegung のような抽象概念に見られるように — 人間の把握にもとづくということである。すなわち、名詞の指示対象が人間の把握の仕方によって Gliederung できるものとしてもできないものとしても表現できるということである、たとえば

単数	複数
Ärger	- Ärgernisse
Bestreben	- Bestrebungen
Verdacht	- Verdachtsmomente

6. Vielheit は「数多性」とも訳せるもので、単なる複数個のものの存在（だけ）ではなく、一つのまとまりとみなすことのできるもの（Gliederung されたもの）の複数的存在である。この観点から単数と複数は次のように特徴づけられることができる（H. Vater 1965）：

Der Plural hat das Merkmal "mehr als eine Einheit", während der Singular - falls es sich um Gegliedertheit des Begriffs handelt - nichts darüber sagt, ob eine einzige Einheit oder ob viele Einheiten dieses Begriffs vorliegen.

単数が Vielheit と直接関与しないことは、次の例から明らかになるであろう：

- (1) manches Auto
- (2) in vielen Hinsicht
- (3) Alle hoben die rechte Hand.
- (4) Der Feind steht vor dem Tor.

したがって、単数と複数の意義素は、有標の複数に無標の単数が向き合うという一種特殊な対立にもとづくものである。

7. 発話において名詞を単数形で用いるか複数形で用いるかは、原則的には名詞の指示物の数的状態と、単数形／複数形の意義素との関係によって決められる。すべての名詞に『数』があるということは、すべての名詞が単数形としても複数形としても用いられるということではない。なかには、その指示内容からして単数形でしか用いられないものも、逆に複数形でしか用いられないものもある（学校文法で「複数形は単数形より作れ」のように単数形を基本形とするような教え方をするが、本来は単数形と複数形との間に主従関係はなく、複数形でしか用いられない名詞も自然な存在である）。

名詞を単数形／複数形の可能性との関係で分類すると、

- (イ) 単数形でも複数形でも用いることのできる名詞
- (ロ) 単数形でのみ用いることのできる名詞
- (ハ) 複数形でのみ用いることのできる名詞

の3種類になるが、5. および6. で述べた Gliederung と Vielheit との視点から―― 例外的な事例も含めつつ―― 名詞を以下に分類してみる。

8. 名詞の概念が Gliederung を許す場合には、原則として、単数形も複数形も可能である、たとえば

Mann - Männer （普通名詞）など →グループ1

Gliederung を許さない場合は当然、単数形のみである、たとえば Zucker（物質名詞）、Geduld（抽象名詞）など →グループ2

現実にはこの原則に、歴史的変化・習慣の結果として従がわない名詞があるので、以下それらをながめてみる。

9. まず 8. よりみて、当然単数形でも複数形で用いられるべきなのに、複数形

で用いることのできない名詞がある、たとえば

Bräutigam, Leber, Polizei など →グループ 3

このグループのなかには複数を表わす形容詞と結びつくものもある。

Hinsicht <in vielen Hinsicht> →グループ 4

逆に名詞の概念が Gliederung を許すと考えられるが、単数形がなく、複数形でのみ用いられるものもある。

Einkünfte, Leute, Herrschaften など →グループ 5

Leute が Gliederung を許し、かつ Vielheit の特徴をもつことは、Kaufmann の複数形として Kaufleute があることから納得できよう。Einkünfte も die einzelnen Einkünfte <個々の収入> のような使われ方をする。

10. 5. および 6. に述べた単数形／複数形の意義素とはまったく矛盾して用いられる名詞もある。これらを Gliederung と Vielheit の特徴と関連づけて分類すると、2つのグループに分けられる。その1つは Gliederung を許さず、したがって Vielheit も表現していないのにもかかわらず — したがって単数形になるべきなのに — 複数形で用いられる名詞である。たとえば：

Maser, Ferien, Sprituosen など →グループ 6

他の1つは、Gliederung を許し、数的に1つのまとまりを表わす場合でも — したがって単数形になるべきなのに — 複数形で用いられる名詞である、たとえば：

Eltern →グループ 7

11. 以上のように、名詞を単数形・複数形の可能性にもとづき、Gliederung/Vielheit と関連づけて分類すると、7つのグループに分類できる。しかし語のなかには、複数個の意味をもつものがあり、それぞれの意味においてグループの所属性が異なる場合もある。その典型的な例は、その原義において Gliederung を許し、複数形でも用いられるようになる名詞である、たとえば

- (イ) 固有名詞 die Goethe <ゲーテのような人々>
 die Meyers <マイヤー家の人々>
 die Heinriche <ハインリッヒという名の人々>
 die zwei Deutschland(s) <2つのドイツ>

(ロ) 物質名詞

- a. 種類 edle Hölzer, rheinische Weine, feste Garne
- b. 個々の形成物 Gläser, Körner, Gräser, Brote など。

12. 現実の発話において名詞は必ずその Numerus と結びつけて用いなければならないため、単数形にするか複数形にするかを常に決定しなければならないが、この決定には究極のところ次の4つの要因が関わることになる。

(イ) 名詞の指示物の数

名詞の指示物が1つならば、単数形を、2つ以上ならば、複数形を用いる、たとえば：

Ich habe einen Freund / Freunde.

(ロ) 形態上の制約

名詞の指示物の数にしたがい、単数形あるいは複数形の適当な方を用いたいところ、形態上の制約から一方に限定されることがある（上述のグループ3／4／5／6／7を参照）、たとえば

Die klassische und moderne Musik gefällt mir.

(Die klassische Musik und die moderne Musik gefallen mir nicht.)

Die deutsche und japanische Polizei kämpfte miteinander.

(ハ) 文法規則

名詞の指示物の数に従えば当然、複数形を使うべきで、また、複数形の使用も許されるが、文法規則にもとづき単数形を用いることがある。たとえば、manches Auto という表現における単数形は、名詞 Auto に複数形がないからではなく、manch- が複数表現の場合にも単数形と結合するという文法規則があるためである。また Sie drehten sofort ihren Kopf. という表現において単数形が用いられるのは、これも名詞 Kopf に複数形がないからではなく、肉体の一部を動かす表現において (die Hand heben など) 単数形を用いるという文法規則があるためである。第3の例は、属全体を指示する用法であろう、たとえば：

der Charakter des Deutschen <ドイツ人の性格>

Der Mensch ist sterblich. 人間は死ぬものである。

(ニ) 言語的把握における傾向

文法上、単数形によっても複数形によっても表現できる場合、すなわち - これは抽象的なことに関係してであるが - 名詞の指示対象を Gliederung でき、かつ Vielheit のものとしても (→複数形)、Gliederung できないものとしても (→単数形) 把握し、表現できる場合、一方が習慣的により好まれることがあ

る、たとえば：

Ich habe heute Pläne.>Ich habe heute einen Plan.

この場合、単数形も複数形も共に誤ちではないが、単なる言語習慣上、複数形の方が好まれるのである。

注：複数語尾は1種の Allomorph であるが、これが示差的特徴として機能することがある、たとえば Bank - Bänke<ベンチ>/Banken <銀行>。なお、外来語における -s式 (Auto - Autos) は簡略化のため無視した。

0 はじめに

中国には、現在《中学教学語法系統提要（試行）》という、中学・高校用の学校文法の体系があるが、この枠組みでは、次の12種の品詞が挙げられている、

- 1) 名詞 2) 動詞 3) 形容詞 4) 数詞 5) 量詞
6) 代詞 7) 副詞 8) 介詞 9) 連詞 10) 助詞（下位分類として‘結構助詞’‘動態助詞’‘語気助詞’がある）
11) 嘆詞 12) 擬声詞

普通、6)の代詞までを‘実詞’といい、それ以下を‘虚詞’と言っている。

本稿では、この枠組みでとりあげられていない‘動名詞’について検討するが、最近、日本語においても、‘動名詞’という品詞を認めるべきだという説が挙がってきているので、両言語の動名詞を対照しながら、論をすすめていく、日本語の動名詞については、影山（1993）による、

1 中国語の動名詞

中国語では、動名詞は‘名動詞’とも呼ばれるが、その内容については、《中国語学大辞典》から引用する、

動名詞とは、中国語において、名詞の文法的性質を備えた動詞で、その大多数は新しく使われるようになった2音節語である、例えば、「調査」「要求」「分析」「改革」「調整」「批評」「転変」「信仰」「生産」などが挙げられる、その文法的特徴は、

- ① 名詞の修飾を直接受けることが可能、例えば、「政治影響」＜政治の影響＞
「数学分析」＜数学の分析＞。
② 「有」＜ある＞「進行」＜行なう＞「加以」＜行なう＞「受到」＜受ける＞といった動詞の目的語になることが可能、

例えば「有影響」＜影響がある＞「進行分析」＜分析をおこなう＞、

「動名詞は複数の品詞にまたがるもので、名詞でもあり動詞でもある」と考える説もある、

朱徳熙（1986）は、上記引用中の②に挙げられた「有」などを‘虚化動詞’あるいは‘形式動詞’（dummy verb）と称し、多くの例を挙げている、そのうちのいくつかをここに引用しよう、

- 進行（行なう）：～調査、～研究、～登記、～戦争
加以（行なう）：～説明、～解釈、～干涉、～改造
給以（与える）：～支持、～幫助、～奨励、～補助
予以（与える）：～考慮、～解釈、～発表、～保障
作（する）：～準備、～支持、～決定、～手術

虚化動詞に後続する語は、必ずしも動名詞だけではなく、少数ながら、純粋な名詞、即ち、「戦争」「手術」のような場合もある。虚化動詞に後続する語は、2音節語に限られるが、それは、朱徳熙によると、次のような理由がある。

虚化動詞が要求する目的語は、動作を表す名詞的成分であるが、これに符合する文法成分は次の2種類に限られる。：一つは、動作を表す純粋な動詞、もう一つは名詞と動詞の性質を兼ね備えた動名詞である。この2種の語は、ほとんど全部が生まれてから余り時間のたっていない2音節語である。口語の単音節語には動名詞もないし、動作を表す純粋な名詞もない。従って2音節語が虚化動詞の目的語にならざるをえないのである。

「虚化動詞+動作を表す2音節語」の表現が中国語に出現したおおよその年代については、朱徳熙はふれていない。この点が筆者の知りたい点なのだが、不明である。なぜこの年代が興味の対象になるかといえば、日本語にもこの表現に似た、「～を行なう」という表現があり、日本語から中国語へと移った表現なのか、それとも中国語から日本語に移った表現なのか、という点が興味深いからである。例えば、日本語にも、「捜査を行なう」「記者会見を行なう」「調査を行なう」などの表現がある。こうした表現は、後述の日本語の動名詞とかわる問題でもある。例えば、《朝日新聞の用語の手びき》（1981）では、「～を行なう」式表現を「～する」式のくだいた表現、すなわち動名詞の表現に変えて書くようにと指導している。

2 日本語の動名詞

影山（1993）は日本語に‘動名詞’（「する」がついて動詞化する名詞）という範疇の設定を主張している。例えば、「研究」と「医者」を比較してみると、どちらも主語や目的語になりうるという点では同じ機能をもっている。しかし、「研究」は「する」を伴って動詞「研究する」として機能可能である。一方、「医者」は、「する」を伴っても、動詞として機能しない。（「*医者する」）

この二つの語について、《岩波・国語辞典》をみると、次のように取り扱われている。

研究〔名・ス他〕（筆者注：「名詞であるが、スルがつくと他動詞になる」の意）

医者（筆者注：品詞の指定なし。凡例を見てみると、「特別の場合を除いて名詞には品詞名を注記しない」とある）

同辞典をさらに調べてみると、漢語と洋語の場合には上記の「研究」のような注記がついているのだが、和語の場合には注記がほどこされていない。例えば、

テスト〔名・ス他〕

間借（り）（無注記）

実は、「間借り」も「する」を伴って動詞として機能するのであるが、そのような注記がない。このことは、国語学が動名詞という範疇を認めていない結果であると思われる。ちなみに、動詞化に使われる動詞は「する」だけではない。例えば、

致す〔四他〕 「する」のへりくだった言い方、「私が～します」「お願い～します」
 (《岩波・国語辞典》)

ここに挙げられている両例とも、「致す」は省略可能である。「お願い～します」では、「致す」は形式動詞として使われている。

3 中・日両語の動名詞の比較

3. 1 転化後の範疇

中・日両語の動名詞の用法は、次のように一般化できる。

中国語の動名詞の用法： 虚化動詞 + 動名詞

(1) 進行 調査

(2) 作 研究

日本語の動名詞の用法： 動名詞 + する

(3) 調査 する

(4) 研究 する

(1) (2) の「調査」「研究」はもともと動詞であるが、「進行」「作」の虚化動詞を前置することによって、名詞へと転化し、虚化動詞の目的語として機能するようになる。これに対して、(3) (4) の「調査」「研究」はもともと名詞であるが、「する」が後続することによって全体が動詞化する、これを式で表すと、次のようになる。

中国語の動名詞：動詞→名詞

日本語の動名詞：名詞→動詞

上の式からわかるように、両語では、動名詞は、転化後の範疇が異なる。

なおここで、動詞・名詞・動名詞を〔±N, ±V〕という2値的素性で規定すると、次のようになる。

	動 詞	名 詞	動名詞
V (動詞性)	+	－	+
N (名詞性)	－	+	+

但し、何を以て‘動詞性’或いは‘名詞性’とするかは、形態的に動詞と名詞を区別不可能な中国語では、問題になるところである。

3. 2 構造の相違

中国語の動名詞は、虚化動詞に後続し、名詞化され、虚化動詞の目的語と考えることができる。このため、中国語の動名詞は、虚化動詞の目的語になったときは、定語（＝連体修飾語）は伴うことができるが、状語（＝連用修飾語）は伴うことができない。

- (5) 進行 農村 調査。
 <行なう> <農村の> <調査を>
 <農村の調査を行なう>

- (6) *進行 馬上 調査。
 <行なう> <すぐに> <調査を>
 <調査をすぐに行なう>

(5)の「農村」は動名詞「調査」を修飾する連体修飾語である。(6)の「馬上」は、連用修飾語であるが、(6)は非文で、「馬上」は、虚化動詞「進行」の前に置かれる。但し、(5)の「農村」は、文法成分は目的語ではないが、意味的には目的語に近い。日本語で言えば、「農村の調査をする」は、「農村を調査する」に意味的に近似している。

また(5)の動名詞「調査」はすでに名詞化しているから、目的語をとることができない。

- (7) *進行 調査 農村。
 <行なう> <調査を> <農村を>

- (8) 対農村 進行 調査。
 <農村に> <行なう> <調査を>
 <農村に調査を行なう>

(7)は動名詞「調査」が「農村」という目的語をとれない例で、(7)の言わんとする意は、(8)のように虚化動詞「進行」の状語として「対農村」を前置しなければならない。

次に中国語では、「虚化動詞+動名詞」の構造において、両成分の間に、他の文法成分が入らなければ語と認めることができるが、実際には(5)のように、「農村」という連体修飾語が挿入されるから、「虚化動詞+動名詞」を語と考えるのは、語の緊密性という観点から不可能である。また動態助詞（＝アスペクト助詞）も、「進行了調査。」（<調査を行なった（完了体）>）のように、両成分の間に挿入されるので、やはり「虚化動詞+動名詞」は語ではなく、句と考えるべきである。

一方、日本語の方は、動名詞が形式動詞「する」に直結している。例えば、「農村を調査する」と「農村の調査をする」において、後者は「調査」と「する」の間に格助詞が挿入されており、句と考えるのが自然であるが、前者にはそのようなことがなく、語としての緊密性が保たれているから、一つの語と考えるのが自然である。なお、形式動詞「する」が活用

機能をもっていることは、中国語の虚化動詞にアスペクト助詞が付加されるのに似ている。

結論を言えば、中国語の‘虚化動詞＋動名詞’は句であるのに対し、日本語の‘動名詞＋する’は語である。

3. 3 項構造

一般に述語は‘項構造’を備えている。例えば、

- (9) 我 対農村 進行 調査。
＜私＞ ＜農村に＞ ＜行なう＞＜調査を＞
＜私は農村に調査を行なう＞

において、項構造を決定するのは、虚化動詞「進行」ではなく、動名詞「調査」である。

(9) の項構造は次のようになる。

- (10) 調査： (Agent (theme))
我 農村

「調査」は動詞として機能する時には他動詞であるが、自動詞の「工作」＜仕事する＞に置き換えてみても、項構造はやはり動名詞が決定することがわかる。

- (11) 我 進行 工作。
＜私＞ ＜行なう＞＜仕事＞
＜私は仕事を行なう＞
(12) 工作： (Agent ())
我

一方、日本語の場合も、中国語と同様、形式動詞「する」が項構造に関与しないことがわかる。

- (13) 我々は農村を調査する。
(14) 調査： (Agent (theme))
我々 農村
(15) 私は散歩する。
(16) 散歩： (Agent ())
私

4 余論

中国語には、‘名形詞’という品詞も考えられている。これは日本語の‘形容名詞’（従来‘形容動詞’と呼ばれていたもの）に見合うもので、例えば、「危険」「困難」「矛盾」

「健康」などである。但し動名詞の場合の虚化動詞に相当するものは、‘名形詞’の場合、「有」〈ある〉位しかない。例えば、

- (17) 「有危険」〈危険がある〉、「有困難」〈困難がある〉、「有矛盾」〈矛盾がある〉

「有」を伴うと、後続の名形詞は名詞化する。しかし、「有」を虚化動詞とみなすのは、無理があるように思われる。

(17)の「有」を「很」〈とても〉という副詞に置き換えると、「危険」「困難」「矛盾」は、名詞から形容詞へと転化する。

- (18) 「很危険」〈とても危険だ〉、「很困難」〈たいへん困難だ〉、「很矛盾」〈たいへん矛盾している〉

動名詞や名形詞を、それぞれ動詞と名詞及び形容詞と名詞に分類する‘兼類’説もあるが、動名詞や名形詞を設定する説と、どちらが望ましいかを決めるのはなかなか難しい。厳密に言語現象を捉えるためには、動名詞や名形詞を設定するのがよいが、少なくとも教育上は‘兼類’（一語が複数の品詞をもつ）としたほうがよいと思う。例えば、中国語の「熱」は、名詞・動詞・形容詞の三つの品詞として機能する。つまり、「ねつ」とも、「熱くする」とも、「熱い」とも解釈可能なのである。とすれば、動名詞や名形詞と同様、‘動名形詞’という新しい範疇を設定しなければならないが、これではあまりにも文法体系が複雑になる。

参考文献

- 影山太郎（1993）《文法と語形成》、ひつじ書房。
片山朝雄（1981）《朝日新聞の手引き》、朝日新聞社。
西尾実・岩淵悦太郎編（1963）《岩波・国語辞典》、岩波書店。
人民教育出版社中学語文室（1984）〈中学教学語法系統提要（試用）〉、《語文教学通訊》第三期所収、3-11ページ。
楊成劉（1991）、〈詞類的劃分原則和謂詞“名詞化”〉、《語法研究和探索、中国語文叢書5》所収、68-86ページ、語文出版社。
張学成（1991）〈動詞名化和動名詞〉、同上書所収、87-98ページ、同上。
中国語言大辞典編委会（1991）《中国語言大辞典》、江西教育出版社。
朱德熙（1986）〈現代書面漢語里的虚化動詞和名動詞〉、《第一屆國際漢語教學討論會論文集》所収、10-16ページ、北京語言学院出版社。

現代朝鮮語の語彙分類の方法

野間秀樹

-
- 0. はじめに
 - 1. 語彙分類の目的と方法
 - 1-1. 語彙分類の目的
 - 1-2. 語彙分類の方法
 - 1-2-1. 語彙そのものに根拠をおく分類
 - 1-2-2. 文法に根拠をおく分類
 - 1-2-3. 語彙＝文法的な分類
 - 1-2-4. テクストに根拠をおく分類
 - 2. 体言分類の試みと展開
 - 2-1. 体言分類の試み
 - 2-2. 体言分類の展開
 - 3. 用言分類の試みと展開
 - 3-1. 語彙的な意味による形容詞の分類
 - 3-2. 単語結合・共起関係による用言分類
 - 3-3. 接続形・連体形による用言分類
 - 4. 辞書への展開
 - 5. おわりに
-

0. はじめに

本稿の目的は現代朝鮮語の語彙分類、とりわけ体言分類・用言分類の意義と方法について考察することにある。

1. 語彙分類の目的と方法

1-1. 語彙分類の目的

語彙分類の目的は次のような点にある：

- ①語彙がどのような体系をなしているかを描き出すこと
- ②分類によって言語を更に精密に記述すること
- ③他言語と共通することがら、共通しないことがらを明らかにすること

分類によって言語を解析することが目標なのであって、分類そのものを最終的な目標としないことをまず第一に確認しておきたい。

1-2. 語彙分類の方法

語彙分類の方法としては次のような方法が考えられる：

- ①語彙そのものに根拠をおく分類
- ②文法に根拠をおく分類
- ③語彙＝文法的な分類
- ④テキストに根拠をおく分類

なお、＜語彙分類＞を意識しないが結果的に語彙分類にもなっているというような語彙分類も過去にはしばしば行われてきた。

1-2-1. 語彙そのものに根拠をおく分類

語彙それ自体を取り出して分類する方法がこれである。

最も単純な方法としては音による語彙分類が考えられる。音節構造による分類、初声・中声・終声別の分類、あるいは何らかの同化を含む語彙を取り出すなど。가나다順に排列された＜辞書＞はそれ自体ですでに一定の語彙分類がなされていることになる。このことでも明らかなように、排列とは分類の契機を内包するものであり、分類はまた排列の契機を内包するものだといえる。

更に、固有語・漢字語・外来語・混種語といった語彙の出自による分類があり、これは一般に行われている。これを＜語種＞と呼ぶことができよう。また語源を利用した分類も様々に考え得る。擬声擬態語を取り出すのも語源による分類の典型である。擬声擬態語に関して、とりわけその境界画定、音節構造や派生による擬声擬態語の分類については野間秀樹(1990c)(1991)を、擬声擬態語を分類した辞書としては연변언어연구소(1982)を参照。

造語法による分類も考えられる。派生接辞がつくかどうか、そのつきかたによる分類も可能である。-이-・-히-・-리-・-기-といったヴォイス接尾辞がつく用言とつかない用言の分類や、-하다や-스럽다がつくかどうかによる分類などもその一例である。

また語彙的な意味そのものによる分類が考えられる。この方法は伝統的に広く行われてきたものである。小倉進平(1944)は主として語彙的な意味により、また一部は品詞によって28のカテゴリーに分類した：

天文、時候、地理・河海、方位、人倫、身体、家屋、服飾、飲食、農耕、花果、菜蔬、金石、器具、舟車、飛禽、走獸、水族、昆虫・爬虫等、草木、形容詞、動詞、助動詞、副詞、助詞、接頭辞・接尾辞、句・短文、雑

梅田博之(1976)は梅田博之(1971)を基礎に、主として語彙的な意味により、また一部は品詞によって基礎語彙を次の28のカテゴリーに分類した：

あいさつ・重要語、代名詞など、助詞など、人体、衣服、食物、住居、道具、生活、人間関係、社会、移動・交通、言語・伝達・文化、遊び・芸術、授受、対人動作、対

物動作、一般動作、知識・精神活動、天文・地文・鉱物、植物、動物、形・色・音・臭、性質、位置、時間、数量、副詞・接続詞等

南永信編(1987)『우리말 분류사전』、박용수(1989)『우리말 갈래사전』は主として語彙的な意味を基準にした分類辞書である。なお、各種の術語辞典類は一般に語彙的な意味を基準にした分類辞書であるともいえる。

임지룡(1989)は『朝鮮館譯語』から『우리말 갈래사전』に至る23種の分類語彙集を対象にその体系と相関性を整理した。また金光海(1993:107-135)においては語彙の意味による分類を中心に整理されている。

정재운(1989)は感覚を表す用言を「動作性感覚動詞」と「状態性感覚動詞」にわけ、更に「視覚動詞」「味覚動詞」「聴覚動詞」「嗅覚動詞」「触角動詞」「痛覚動詞」「温覚動詞」「冷覚動詞」「有機感覚動詞」に細分した。なお、ここでいう「動詞」には形容詞も含まれている。

1-2-2. 文法に根拠をおく分類

語彙を文法によって分類する典型としては品詞分類をあげることができる。これは言うまでもなく伝統的な文法の1つの大きな柱となるものであり、ここでは詳説しない。品詞分類についての諸見解をまとめたものとしては李光政(1987)がある。

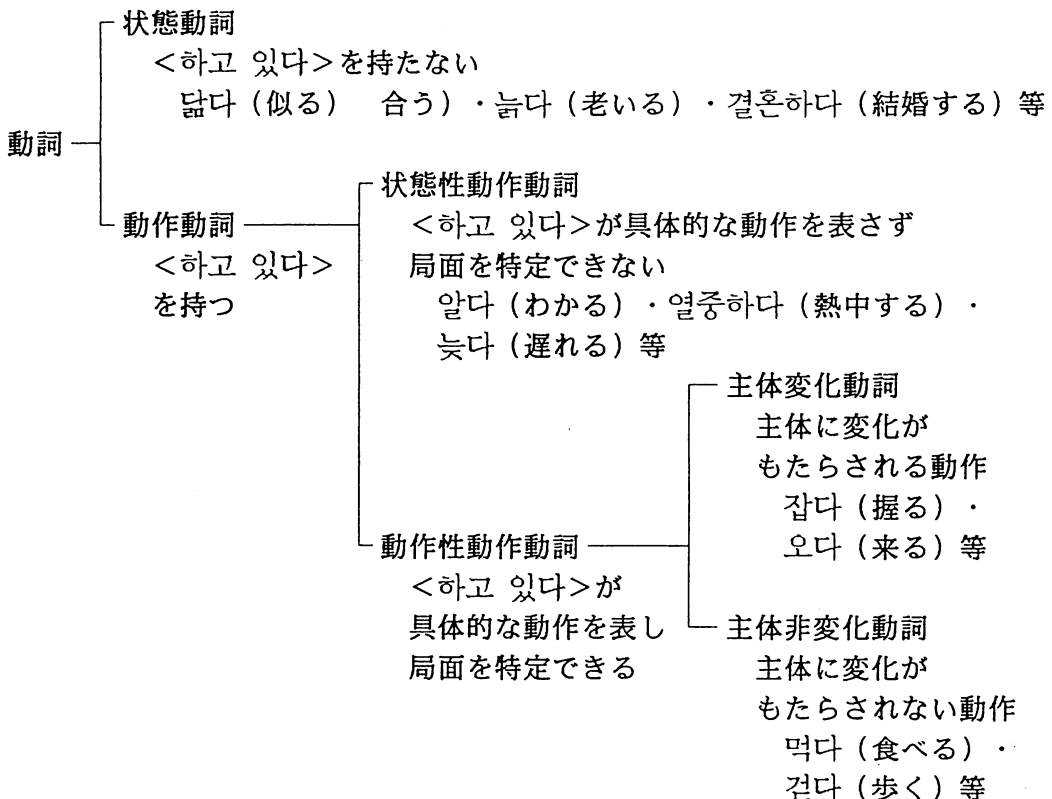
菅野裕臣(1987)は未公開ながら文法的な形との関連における体言分類・用言分類としては事実上初めての試みである。名詞を多数性の接尾辞-들이がつくかどうかで可算名詞／不可算名詞に分けるなどを始め、次のような分類を示している：

소	可 算 名 詞	生 기 物 名 詞	非 人 間 名 詞				動 物 名 詞
사람			人 間 名 詞	非 固 有 名 詞	個 体	非尊敬名詞	人 間 名 詞
분					名 詞	尊 敬 名 詞	
대중					集 合 名 詞		集 合 名 詞
이순신	不可算		非 生 き 物 名 詞				固 有 名 詞
한국	名 詞	固 有 名 詞					
책	可 算	具 象 名 詞					
개념	名 詞	抽 象 名 詞					
물	不可算名詞	不可算名詞					

菅野裕臣(1987)ではこの他にも야단・마련・일쭉・지경などは述語形と一部の格しか持たないとして<述語名詞>と名づけ、これ以外の名詞を<非述語名詞>と呼んだが、このような<A名詞>：<非A名詞>という分類を数多く提起している。また助数詞との関連による名詞分類を初めて試みている。助数詞컬레をとる신・구두を<履物名詞>、助数詞권을とる책・잡지・노트・일기などを<書籍名詞>といった具合である。用言についても、人間名詞を主語としてそれに対応する用言を<人間用言>そ

れ以外を<非人間用言>、アスペクト形<Ⅰ-고 있다>、<Ⅲ 있다>の一方あるいは双方をとりうる動詞を<アスペクト動詞>、いずれもとれない動詞を<非アスペクト動詞>、アスペクト動詞のうちⅠ-고 있다形だけをとりうる動詞を<非限界動詞>と名づけるなど、示唆に富む。

文法に根拠をおく分類では、アスペクトを根拠にした動詞分類が最も盛んである。動詞の文法範疇としてアスペクトを最初に論じたのはXolodovich(1954)であり、Guseva(1961)がアクツィオンスアールト(sposob dejstviya)による動詞分類を行った。またRachkov(1962)は限界動詞・非限界動詞のカテゴリーを提起、Xolodovich(1963)はこれを修正した。油谷幸利(1978)の動詞分類は韓国に大きな影響を与え、これを承けて정문수(1981)などの説が提起され、塩田今日子(1986)が出た。菅野裕臣他(1988)『コスモス朝和辞典』は3600語余りの動詞の全てに<Ⅰ-고 있다>と<Ⅲ 있다>をとりうるかどうかを示し、結果としてアスペクトによる広汎な動詞の分類を試みている。浜之上幸(1991)はアスペクトによるこうした動詞分類の最も進んだ成果であり、また研究史についても菅野裕臣(1990)と並んで詳しい。浜之上幸(1991)による動詞分類の骨格を整理すると次の如くである：



ただし、そもそも「<Ⅰ-고 있다>をとりうる」という時、動作の持続なのか、反復なのか、いったいどのような意味として可能なのかという点を曖昧にしては精密な議論が難しくなる。例えば、결혼하다や사망하다のように하고있다形がないとされる

用言も断続的な反復や複数主体の動作の場合には하고있다形が可能となるが、そうした点を踏まえてアスペクトによる動詞分類は再検討されねばなるまい。この点に関しては野間秀樹(1993a)を参照。

また、例えば먹다(食べる)は「나는 먹기 시작한다(私は食べ始める)」～「나는 먹는 중이다(私は食べる途中だ)」～「나는 다 먹었다(私は食べ終わった)」あるいは「나는 먹는 것이 끝났다(私は食べるのが終わった)」のように、主体나(私)の먹다という動作に一連の時間的な局面を想定し得る。これに対し、결혼하다(結婚する)は、「*나는 결혼하기 시작한다(私は結婚し始める)」～「*나는 결혼하는 중이다(私は結婚する途中だ)」～「*나는 다 결혼했다(私は結婚し終わった)」あるいは「*나는 결혼하는 것이 끝났다(私は結婚し終わった)」というような一連の局面を想定し得ない動詞である。そこで単一主体の単一動作という条件に限定した局面の有無によって次の2つのタイプを設定し得る：

有局面動詞…하기 시작하다あるいは하는중이다が可能な動詞。

먹다(밥을)・다니다・오다など

無局面動詞…하기 시작하다・하는중이다がいずれも不可能な動詞。

결혼하다・입학하다・남다など

このほかに、後にも述べるように、文法に根拠をおく分類としては接続形を基準にした用言分類の試みが考えられる。서정수(1990)は<어서>の「基本意味」は「가짐」であり、「状態性用言」では「因果的連結」となり、「時間性状態用言」では「限時的連結」、「非状態性用言」では「継起限定的連結」となるとした。ただし用言分類を論じた論考ではない。

1-2-3. 語彙=文法的な分類

先に、文法に根拠をおく分類と述べたが、純粹に文法にのみ根拠をおいた分類は難しい。逆に純粹に語彙的な分類も難しいものがある。いくつかの分類の試みにおいて語彙的な意味による分類に品詞分類が併用されていることを見ても純粹に語彙的な分類というものが果たして可能かという問題が残る。具体性のある名詞では比較的分類し易いが、用言、とりわけ動詞になると当該の単語のみを取り出してその語彙的な意味を決定したり分類したりすることは非常に困難である。

そこで後述するように、とりわけ用言の場合は主体や対象語等を始めとする文の共起成分を予め考慮にいれた分類を行ってみることが必要になる。

そうした作業を行う際に、辞書の記述のみを基礎にするのは本末転倒である。また母語話者の内省にのみ頼るのも不十分だといわざるを得ない。やはり実際のテキストの調査を基礎に行うのが最も現実的な方法である。ただしどれだけの量のテキストを調査するかという、<テキストの量>、そこから決定づけられる<標本数の豊富さ>が不可欠の前提となる。テキストの質の問題はおのずから次項<テキストに根拠をおく分類>へと関わってくる。

1-2-4. テキストに根拠をおく分類

テキストあるいはディスコースに根拠をおく分類とは、話しことばか書きことばか、あるいはどのような話者・作家のテキストか、小説・戯曲・論説文等々のうちどのようなジャンルのテキストか、過去を語るテキストか現在を述べるテキストか、何年代のテキストか、等々の、テキスト別の使用語彙の分類ということになる。俗語・卑語・詩語といった分類もこれに属す。

また、使用頻度調査もまた一種の語彙分類だと言える。문교부(1956)や사회과학원 언어연구소편(1992)に付された頻度表のほか、小学生の学習用語彙に関する李應百(1989)がある。また油谷幸利(1986)(1987)(1988)は中学校社会科教科書のKWIC索引であるが、これもある意味ではテキストに根拠をおく語彙分類となっている。

野間秀樹(1993a)においては調査したテキストは小説を中心にしたが、これは小説が散文の中では最も語彙使用の幅が広いと思われるからである。野間秀樹(1993b)では小説と戯曲、放送やビデオのスク립トを用いている。これらのテキスト選定の原則を整理すると次の通りである：

(1)時代限定の原則

同時代のテキストを対象にするという考えから、1980年以降に発行されたものであること。書かれた時期と発行時期が著しくずれているテキストは避ける。発行年代は概ね10年ぐらいの幅にとりあえず設定しておき、共時的な調査のみならず将来の通時的な整理までをも射程に入れておく。

(2)場所限定の原則

韓国で発行されたものであること。共和国か、延辺か等々、場所は混ぜない。

(3)ジャンル限定の原則

小説・戯曲などといったジャンルを明確にし、限定して扱うこと。意識的に多くのジャンルにわたる場合以外はとりあえずジャンルを限っておいた方が後々の研究に資するところが多い。

(4)方言限定の原則

小説や放送などでは会話文中にあちらこちらの方言が混在したものは避けること。まず標準語ないしはソウル方言のものから扱うこととする。

2. 体言分類の試みと展開

2-1. 体言分類の試み

野間秀樹(1990b)では名詞の語彙＝文法的な分類を試みた。分類の基準は次の通りである：

- (1)格語尾・接尾辞など文法的な諸要素のつきかた
- (2)名数詞（類別詞）のつきかた
- (3)語彙的な意味

分類の全体像は次の通り。ただし具体名詞の下位範疇としてあった身体名詞を本稿

では独立させてある：

完全名詞	動物名詞	ANI	개, 새	活動体名詞	VIV	可算名詞 KAL
	人間名詞	HOM	사람, 학자	不活動体名詞		
	団体名詞	ASO	회사, 당			
	場所名詞	LOK	곳, 장소, 도시			
	具體名詞	KON	짐, 나무			
	身體名詞	KOR	손, 얼굴, 몸			
	事柄名詞	AFR	생각, 사실, 언어			
	抽象名詞	ABS	도덕, 각도			不可算名詞
	物質名詞	MAT	물, 가스			
	性質名詞	KVA	필요, 안전			
	活動名詞	AKT	조심, 인쇄			
	營為名詞	AGO	빨래, 인사			
	位置名詞	POZ	위, 앞, 뒤			
	時間名詞	TEM	오늘, 봄			
數量名詞	NOM	삼인분, 천원				
形容名詞		객관적, 미적				
不完全名詞	第一群		분, 나름, 따위	바람 만, 남짓		
	第二群		것, 나위, 리			
	名數詞		개, 잔, 번, 월			

▲▲完全名詞…名詞のうち自立語として単独で用いられる単語

▲可算名詞…複数を示す接尾辞-들이がつきうるか、하나・둘…等々の数詞や名数詞を用いるなどして数えることのできる名詞。ただし可算・不可算を機械的に区別することは難しい。

▼活動体名詞…与格で-에게; -한테をとる名詞。-에게서; -한테서をとりえ、普通-에서はとらず、また名数詞がで数えることはしない。動物名詞・人間名詞がこれに属する。意志動詞、とりわけ移動を表す動詞の主語は活動体名詞であることが圧倒的に多い。菅野裕臣(1987)の「生き物名詞」に相当。

▼不活動体名詞…与格で-에게; -한테をとらない名詞。-에게서; -한테서をとらず、

普通-에서はとらない。また名数詞사람, 명, 마리로数えることはしない。

(1)動物名詞 ANI 개, 새

活動体名詞のうち名数詞で마리를とり、与格では普通-더러をとらない。語彙的な意味ではいわゆる動物と考えられるもの。

(2)人間名詞 HOM 사람, 학자

活動体名詞のうち与格で-더러をとりえ、名数詞で마리를とらないもの。尊敬の体言語尾-께・-께서・-께서는をとりうるのは基本的に人間名詞。語彙的な意味ではいわゆる人間と考えられるもの。親族名詞・職業名詞はこの人間名詞の下位範疇。

(3)団体名詞 ASO 회사, 당

-에서がついて主語の働きをし得るもの。語彙的な意味では団体や機関を表す名詞。場所名詞にまたがることが多い。活動体である人間名詞と不活動体である場所名詞との中間的な位置にある。

(4)場所名詞 LOK 곳, 장소, 도시

不活動体名詞のうち-에서がついてあることがらが行われる場所、あるいは空間的な起点を表し、-로/-으로がついて主として方向を表すもの。語彙的な意味からはいわゆる場所を表すもの。移動動詞の主語になることはほとんどない。

(5)具体名詞 KON 짐, 나무

可算名詞の不活動体名詞のうち主に具体物を表すもの。개를始めとして様々な名数詞が用いられる。名数詞によってさらに細分化できる。植物名を表すものもここに属す。-로/-으로格で道具を表すことができる。

(6)身体名詞 KOR 손, 몸, 얼굴, 심장

可算名詞の不活動体名詞のうち人間の身体の部分を表すもの。-에서をとって場所的な意味を表すことしばしばで、具体名詞と場所名詞の境界的な位置を占めている。具体名詞の下位範疇と考えることもできるが、単語結合や統辞論的な性質からは区別しておいた方がよい。

(7)事柄名詞 AFR 생각, 사실, 언어

可算名詞の不活動体名詞のうち様々な抽象的概念を表すもの。菅野裕臣(1987)で「抽象名詞」とされているものに相当。하나・둘…という数え方の他、とりわけ話しことばでは名数詞にまま개も用いられる。可算名詞・不可算名詞の境界は、可算名詞である事柄名詞と、不可算である抽象名詞・活動名詞をまたいだ、非常にくゆるい>境界となっている。

▲不可算名詞…複数を示す接尾辞-들이つかず、하나・둘…等々の数詞や名数詞も普通用いられない名詞。不可算名詞は全て不活動体である。

(8)位置名詞 POZ 위, 앞, 뒤

不可算名詞のうち格語尾-의のあとにつき位置を表すもの。格語尾-의の後につくことは希である。-에서がつくと場所・空間的起点を表す。

(9)時間名詞 TEM 오늘, 봄

不可算名詞のうち格語尾の-부터がつきうるもの。語彙的な意味からは時間を表すもの。なお、様態語尾（とりたて語尾）の-부터は基本的にどんな名詞にもつく。菅野裕臣(1987)による。

体言語尾-를／-을がついて期間を表す状況語になり得るのは、数詞・名数詞以外ではこの時間名詞のみ。이제や아까など副詞とまたがるものがある。

(10)数量名詞 NOM 삼인분, 천원

不可算名詞のうち数量や単位を表すもの。数詞や名数詞との境界的な位置にある。

(11)抽象名詞 ABS 도덕, 각도

他の不可算名詞を除いた、様々な事象・現象・関係を表すもの。비・가뭄・불など自然現象を表す一群は現象名詞として下位範疇をなすと見てもよい。色の名称を表す色彩名詞も下位範疇としてまとめうる。-부리다がついて動詞となる名詞は概ね抽象名詞。動詞を作る-되다は抽象名詞にはつかない。

(12)物質名詞 MAT 물, 가스

不可算名詞のうち格語尾-로／-으로と生産動詞만들다などとの組み合わせで材料を表すもの。語彙的な意味からは料理の材料名・鉱物名・液体や気体の名称を表すもの。

(13)性質名詞 KVA 필요, 안전

不可算名詞のうち-하다をつけると形容詞となるもの。ほとんどが漢字語。動詞を作る-되다はほとんどつかない。

(14)活動名詞 AKT 조심, 인쇄

不可算名詞で-하다をつけると動詞になるもののうち、<-를／-을 가다>がつかないもの。多くは漢字語。감격・고민・조심・호흡など、心的なあるいは対自的な活動を表すグループと、발전・인쇄・가위바위보・사과など、社会的なあるいは対他的な活動を表すグループがある。고자질・양치질など、接尾辞-질을持つ名詞は概ね活動名詞。接尾辞-시(視)や-화(化)を持つものは活動名詞。-되다がついて動詞となるものも多い。

(15)営為名詞 AGO 빨래, 구경, 쇼핑

不可算名詞で-하다をつけると動詞になるもののうち、<-를／-을 가다>がつかないもの。ほとんどが-되다はつかない。

(16)形容名詞 객관적, 미적

接尾辞-적(的)を持つ名詞。菅野裕臣(1981)による。

▲▲不完全名詞…文法的には名詞だが自立語として単独で用いられることがなく、常に修飾語の後ろでのみ用いられるという機能上の著しい制約がある単語

2-2. 体言分類の展開

野間秀樹(1990b)で詳述した如く、格語尾や名数詞、語彙的な意味による名詞分類は、接頭辞・接尾辞、主語・述語の対応関係、対応する疑問詞、固有名詞の有無、用言を作る造語接尾辞など、様々な語彙的・文法的性質とも深い関わりがあることがわ

かる。

体言分類を基礎にすると、例えば他動詞の主語にはどのような体言が現れるかといったことも計量することができる。以下、野間秀樹(1993a)による：

主語の形で明示的に現れているもの	1534例	100.0%
主語が活動体	1445例	94.2%
主語が不活動体	89例	5.8%

また対格をとる体言を体言範疇別に観察することもできる：

【表】-을格の体言の体言範疇別頻度と各範疇ごとの代表的な体言例

<体言範疇 頻度：全体に対する比率：頻度累計：代表例>

抽象	585	: 19.2%	: 585	: 화 (怒り) 10例、돈 (お金) 8例
活動	485	: 15.9%	: 1070	: 말 (ことば) 45例、생각 (考え) 22例
具体	449	: 14.8%	: 1519	: 문 (ドア) 21例、옷 (服) 13例、버스 (バス) 13例
人間	243	: 8.0%	: 1762	: 여자 (女) 28例、사람 (人) 19例
身体	233	: 7.7%	: 1995	: 손 (手) 23例、눈 (眼) 22例
場所	183	: 6.0%	: 2178	: 집 (家) 34例、마을 (村) 8例
人称代名詞	112	: 3.7%	: 2290	: 나 (私) 64例、저 (わたくし) 11例
親族	105	: 3.4%	: 2395	: 고모 (おば) 19例、아버지 (父) 18例
事柄	91	: 3.0%	: 2486	: 일 (こと) 38例、소식 (便り) 7例
現象	87	: 2.9%	: 2573	: 소리 (声・音) 23例、한숨 (ため息) 9例
不完全	79	: 2.6%	: 2652	: 것 (もの) 57例、줄 (こと) 5例
物質	73	: 2.4%	: 2725	: 술 (酒) 12例、물 (水) 11例
体言形	57	: 1.9%	: 2782	: 것임 (ものであること) 6例、울음 (泣き) 4例
数量	49	: 1.6%	: 2831	: 하나 (1つ) 5例、원 (ウォン) 4例
時間	46	: 1.5%	: 2877	: 첫날밤 (初夜) 12例、밤 (夜) 8例
事物代名詞	44	: 1.5%	: 2921	: 그것 (それ) 31例、그것들 (それら) 5例
位置	38	: 1.2%	: 2959	: 속 (中・奥) 7例、앞 (前) 6例
文	32	: 1.1%	: 2991	:
団体	18	: 0.6%	: 3009	: 학교 (学校) 4例、나라 (国) 3例
性質	14	: 0.5%	: 3023	: 행복 (幸福) 5例、(孤独) 1例
営為	14	: 0.5%	: 3037	: 구경 (見物) 4例、낚시질 (釣り) 2例
場所代名詞	4	: 0.1%	: 3041	: 이곳 (ここ) 1例、(あっち) 1例
動物	3	: 0.1%	: 3044	: 말 (馬) 1例、맹수 (猛獣) 1例
計			100.0%	: 3044例

#人間名詞+親族名詞 = 348例 11.4%

#人間名詞+親族名詞+人称代名詞 = 460 15.1%

#代名詞 = 160例 5.3%

上の-를格の場合の体言範疇別分布と他の格の場合のそれを比較すると面白い。-에서格について体言分類を応用した研究に趙義成(1993)がある。なお、ここでは身体名詞は具体名詞として計量されている：

【表】-에서格の体言範疇別頻度 趙義成(1993)による

場所名詞	978	:	38.9%	:	978
位置名詞	755	:	30.0%	:	1733
具体名詞	239	:	9.5%	:	1972
抽象名詞	217	:	8.6%	:	2189
団体名詞	169	:	6.7%	:	2358
事柄名詞	78	:	3.1%	:	2436
活動名詞	49	:	1.9%	:	2485
その他	28	:	1.1%	:	2513
計			100.0%	:	2513例

このように-를格と-에서格では当然のことながら分布上の著しい差を確認することができよう。-에서格では上位5位で95%近くを占めていることがはっきりとわかる。様々な格で同様に調査してゆけば更にいろいろなことが明らかになるに違いない。これまでは漠然としか感じられていなかったこうした体言の分布を計量的に分析できるようになったのも、全名詞を分類するという分類方法があって初めて可能になったことなのである。

体言分類を利用すれば、用言の出現頻度と-를格の体言範疇の多様性による用言の分布といったことも観察し得るし(1993a:100)、あるいはまた格の共起などの分析にも活用することができる(1993a:111-129)：

【表】前置の-에格と共起する-를格の体言の分類別頻度 計126例中

抽象	: 28	: 22.2%	事柄	: 4	: 3.2%
活動	: 25	: 19.8%	時間	: 2	: 1.6%
具体	: 21	: 16.7%	不完全	: 1	: 0.8%
身体	: 16	: 12.7%	動物	: 1	: 0.8%
人間	: 5	: 4.0%	体言形	: 1	: 0.8%
場所	: 5	: 4.0%	性質	: 1	: 0.8%
現象	: 5	: 4.0%	事物代名詞	: 1	: 0.8%
物質	: 4	: 3.2%	営為	: 1	: 0.8%
数量	: 4	: 3.2%	位置	: 1	: 0.8%
			計	: 126	: 100.0%

こうして見てくるとわかるように、体言範疇分布は条件ごとに様々に異なって現れるが、それには自ずから理由があるわけで、そういう分布の差の理由を分析すること

はとりもなおさず朝鮮語の解析そのものだといえよう。

体言分類をとりあえず行っておくことによって、統辞論、とりわけ用言との単語結合を解析するのにも役立つ。野間秀樹(1990b)より一部引用する：

例えば、形容詞밝다（明るい）は次のような単語結合で用いられる：

具体(KON)/場所(LOK)/事柄(AFR)/位置(POZ)-가／-이 밝다

그 방이 더 밝아요. その部屋がもっと明るいですよ。

人間(HOM)-가／-이 事柄(AFR)/抽象(ABS)/活動(AKT)/営為(AGO)-에 밝다

그 사람은 야구에 밝아요. 彼は野球に明るいです。

動詞가다（行く）なら次のような型をあげることができる：

場所(LOK)/位置(POZ)-에 가다

형은 학교에 갔습니다. 兄は学校へ行きました。

人間(HOM)-한테／-에게 가다

형한테 가 봐. 兄さんのところへ行ってみろ。

場所(LOK)/位置(POZ)-를／-을 가다

이 길을 가십시오. この道をお行きください。

営為(AGO)-를／-을 가다

구경을 갔습니다. 見物に行きました。

조르다（締める・せがむ）の例も見しておく：

具体(KON)-를／-을 조르다

목을 졸라 죽였다. 首を締めて殺した。

人間(HOM)-를／-을 조르다

돈을 달라고 아버지를 졸랐다. 金を呉れと父にせがんだ。

上のように、名詞のclassを用いて、例えば用言の単語結合のしかたを記述することが可能である。朝鮮語の連語論を考察するにあたっては名詞のclassの研究は不可欠のものであると言えよう。こうして他の品詞の分類、特に用言の分類と併せて考えることによって朝鮮語の言語事実はより系統だてて把握することができる。一体どういう種類の名詞が、どのような体言語尾を従え、どのような用言と結びつくことによって、どのような意味として実現するのかということを捉えることができるのである。これは即ち、単語が意味として実現するまさにその実現のしかたの解明へと接近することにほかならない。

このように、体言分類は、文法論が語彙論を深化させ、語彙論が文法論をおし進めるという理想的な関係を作り出す、極めて重要な課題だといえることができる。

3. 用言分類の試み

3-1. 語彙的な意味による形容詞の分類

前述のように、語彙的な意味による分類は語彙分類の最も原初的な方法である。ここでは語彙的な意味による形容詞の分類を試みることにする。

例えば次のような分類が考えられる。例に挙げた単語は菅野裕臣他(1988;1991)で重要語指定のある形容詞である：

(1)形態形容詞

길다 (長い) · 짧다 (短い) · 높다 (高い) · 낮다 (低い) · 깊다 (深い) ·
얕다 (浅い) · 넓다 (広い) · 좁다 (狭い) · 두껍다 (厚い) · 얇다 (薄い) ·
굵다 (太い) · 가늘다 (細い) · 둥글다 (丸い) · 굽다 (曲がっている)

(2)性質形容詞

세다 (強い) · 강하다 (強い) · 약하다 (弱い) · 튼튼하다 (丈夫だ) ·
얇다 (薄い) · 급하다 (急だ;せっかちだ) · 똑똑하다 (利口だ) ·
굳다 (固い) · 단단하다 (しっかりしている) · 부드럽다 (柔らかい)

(3)美醜形容詞

아름답다 (美しい) · 곱다 (きれいだ) · 예쁘다 (可愛い) · 귀엽다 (可愛い)

(4)色彩形容詞

하얗다 (白い) · 검다 (黒い) · 까맣다 (黒い) · 빨강다 (紅い) ·
붉다 (赤い) · 노랗다 (黄色い) · 푸르다 (青い) · 파랗다 (青い)

(5)度量形容詞

크다 (大きい) · 작다 (小さい) · 무겁다 (重い) · 가볍다 (軽い) ·
멀다 (遠い) · 가깝다 (近い) · 빠르다 (速い) · 천천하다 (ゆっくりだ) ·
늦다 (遅い) · 비싸다 (高価だ) · 싸다 (安い) · 많다 (多い) ·
넉넉하다 (十分だ) · 적다 (少ない)

(6)状態形容詞

같다 (同じだ) · 비슷하다 (似ている) · 다르다 (異なる) · 어리다 (幼い) ·
젊다 (若い) · 친하다 (親しい) · 자세하다 (詳しい) · 유명하다 (有名だ) ·
바쁘다 (忙しい) · 안녕하다 (お元気だ) · 밝다 (明るい) · 어둡다 (暗い) ·
조용하다 (静かだ) · 깨끗하다 (清い) · 더럽다 (汚い)

(7)温度形容詞

뜨겁다 (熱い) · 덥다 (暑い) · 따뜻하다 (暖かい) · 시원하다 (涼しい) ·
차다 (冷たい) · 춥다 (寒い)

(8)味覚形容詞

달다 (甘い) · 맵다 (辛い) · 짜다 (塩辛い) · 싱겁다 (味が薄い)

(9)心境形容詞

기쁘다 (嬉しい) · 반갑다 (懐かしい) · 즐겁다 (楽しい) · 슬프다 (悲しい) ·

무섭다 (恐ろしい)・두렵다 (怖い)・괴롭다 (苦しい)・고맙다 (有り難い)・
부끄럽다 (恥ずかしい)・창피하다 (恥ずかしい)・싫다 (嫌だ)
싫다 (憎らしい)

(10) 評価形容詞

옳다 (正しい)・바르다 (正しい)・좋다 (良い)・나쁘다 (悪い)・
굉장하다 (凄い)・대단하다 (大変なものだ)・괜찮다 (構わない)・
어렵다 (難しい)・쉽다 (易しい)・그렇다 (そうだ)・어떻다 (どんなだ)

語彙的な意味による分類はそれだけでは自己完結的で単なる試みに終わってしまいやすい。形容詞分類も語彙的な意味と統辞論・形態論との関係にまで踏み込んで初めて言語研究にとって深い意義を持つことになる。例えば、主体には何が来るか、人が主語に立ちうるか、特定の格を要求するか、述語になりうるかどうか、連体形になりうるかどうか、どのような連体形をとりどのような意味で用いられるか、連体修飾の場合の被修飾語にはどのようなものが来るか、接続形をとる場合はどのような接続形がどのような意味で用いられるか、どのような副詞と共起するか、造語成分による派生が可能か、等々の問題については少なくとも大規模な調査が行われねばなるまい。

なお、副詞の問題が出たので、副詞の分類にも言及しておく：

- (1) 程度副詞…다 (全部)・더 (もっと)・무척 (すごく)・너무 (あまりに)
- (2) 頻度副詞…다시 (再び)・또 (また)・자주 (しょっちゅう)
- (3) 時間副詞…오래 (長い間)・계속 (ずっと)・잠깐 (ちょっと)
- (4) 様態副詞…잘 (よく)・그대로 (そのまま)・빨리 (速く)・꼭 (ぎゅっと)
- (5) 陳述副詞…과연 (果たして)・아마 (おそらく)
- (6) 否定副詞…안 (…しない)・못 (…できない)
- (7) 疑問副詞…왜 (なぜ)・어째서 (どうして)・어떻게 (どのように)

副詞の分類の問題については徐尚揆(1991)参照。

3-2. 単語結合・共起関係による用言分類

先にも触れたが、가다 (行く) や먹다 (食べる) といった用言をそれだけ取り出して単独で意味を決定するのは易いようで非常に難しい。そうである以上、文法との関連での用言分類もはなはだ恣意的・部分的なものになりがちである。実は前節の形容詞の分類の記述のしかたとてそうした恣意性・部分性を免れていない。

他の例をあげれば、가다 はアスペクト形<가고 있다><가 있다>の両方を取り得る動詞であると言われている。しかし自動詞の移動動詞としては可能でも、<음식이 오래 가다> (食べ物が長持ちする) のような自動詞の他の用法、あるいは<이 길을 가다> (この道に行く) や<구경을 가다> (見物に行く) のような他動詞の用法では難しい。このように用言を単独で取り出して分類するのはともすると粗雑で危険な議論に陥り易い。アスペクトによる動詞分類ではしばしばこうした乱暴な方法がとられていた点に我々は注意する必要がある。ようやく浜之上幸(1991)に至って、全て

の動詞に<먹다:비빔밥을>（食べる:ピビンパを）のように対象語や関連する単語が併記され、議論が着実になってきている。

突き詰めていえば、語彙的な意味は須らくテキストのうちにあって最終的に確定される。単語はそれ自体でアプリオリに意味を持っているのではなく、織り出されたテキストを一定の言語的な場>のうちで読むことによって<意味となる>のだといわねばならない。そうした事情を考慮するなら、가다（行く）というような単語1つを取り出して母語話者が内省によって語彙的な意味や文法との関連を云々する営みは、内省時の母語話者がその単語の総体を把握しているという幻想にどこかで支えられているということになる。言うまでもなく単語の用法の総体を内省によって把握することは不可能であるし、用法の大部分をとという条件さえ満たすことも極めて難しいに違いない。特に用言の場合はそうである。こうして我々は<単語の意味の不決定性>というようなものに突き当たることになる。単語だけを取り出して語彙的な意味を決定したり、文法との関連を決定づけることは原理的には不可能なのである。

このような点に鑑み、単語の用言の意味の問題や文法との関連を探る際には、テキストとまでは行かずとも文単位で、少なくとも他の単語との結合のありかたを単位として作業を進めるのが妥当な方法ということになる。

まず<학교를 가다><음식이 오래 가다><비빔밥을 먹다><겁을 먹다>等々の単語結合に注目し、用言のそうした単語結合にはどのような型があるかという単語結合の分類から始め、最終的にそうした単語結合の型の分類をにらみ合わせながら用言そのものの分類へと進むという方法をとることが有効であろう。<비빔밥을 먹다>（ピビンパを食べる）における動詞<먹다>が<겁을 먹다>（怖じ気づく）や<더위를 먹다>（暑気あたりする）における動詞<먹다>と同じ振る舞いをするという保証はどこにもない。먹다を扱おうとするなら、これら対格に据えられたそれぞれの体言を捨象していきなり動詞分類に入ることはできない。現段階の用言分類はまず単語結合の分類を徹底させることでなければならぬ：

単語結合の型の分類 → 用言の分類

さらに単語結合のみで解決できない場合は、単語結合をなさないような他の共起成分との連関まで見て行く必要も出てくるに違いない。

そして単語結合・共起関係の分析には、大規模なテキストの走査が不可欠となる。

野間秀樹(1993a)では、格語尾-를/-을と用言、そしてその他の共起成分との連関によって実際のテキストの中から対格と他動詞の単語結合の型を抽出した。-를格と動詞の単語結合の型を分類すると大きく分けて次の5つの型があることがわかった：

(1)客体的な対象への作用

最も他動性が強いグループである。-를格に立つ対象は、主体と対峙するところの明確な輪郭を持った客体として設定される。この型の動詞からはしばしば受身形が作られる。また人に何事かをさせるという使役の構造を持つものもこの型に属する。

(2)客体的対象への主体内的な作用

対象が主体の外にあっても、動作自体は専ら主体内での作用が主となっているグループである。飲食動詞や知覚動詞・精神動詞のように-을格の対象が明らかに客体的な位置にあるものから、生理動詞のように-을格の対象が息や涙など主体から発せられた事物である一群へと連なる。

(3)主体への再帰的な作用

主体の動作が逆に主体に及んでくる再帰的な作用を表すグループがこれである。

(4)客体的対象からの主体への作用

他動詞であっても他動性が非常に弱く、客体的な対象に働きかけるというよりはむしろ受身的である動詞がこれに属する。まずほとんどの動詞が受身形をつくることはできない。

(5)状況的な対象へのかかわり

-을格が場や時、環境といった状況的な対象として設定されているグループがこれである。このグループは先のグループより遥かに他動性が弱く、大部分の動詞は受身形を作りえない。

3-3. 接続形・連体形による用言分類

また、野間秀樹(1993b)では、用言の接続形 I -다가を用いて用言を次のように分類することを提起した：

하다가用言……하다가の形式で用いられる用言

非하다가用言…하다가をとりえないか、とる確率の極めて低い用言

同様にⅢ-다가を用いても可能だし、更に言えば接続形を用いて用言を分類することが可能となる。

また、逆に語尾の方から見ると、あるCという接続形を考えると、そもそもそうした<C用言>と<非C用言>という分類を許さない接続形も存在することが一方に想定し得る。例えばⅠ-고(하고)やⅠ-지만(하지만)や「理由」を表すⅡ-니까

(하니까)はおそらくそうした例であろう。つまり接続形をはじめとする全ての用言語尾には、하다가や해다가のように一般に限られた語彙しかとらない、語彙制約性の強い語尾と、하고のように様々な語彙につく、語彙制約性の弱い語尾が存在すると考えることができる：

強語彙制約性語尾…語彙制約性の強い語尾。Ⅰ-다가・Ⅲ-다가など。

弱語彙制約性語尾…語彙制約性の弱い語尾。Ⅰ-고・Ⅰ-지만・Ⅱ-니까など。

ちなみに하다가用言にはどのようなタイプの他動詞があるかを、他動詞の単語結合による分類と重ね合わせて見ることができる：

処理動詞 10例 하다：일을(する：仕事を)等

身体動詞 10例 흔들어대다：머리통을(振る：頭を)等

知覚動詞	10例	보다: 그것을 (見る:それを) 等
精神動詞	9例	읽다: 책을 (読む:本を) 等
提示動詞	7例	쓰다: 신경을 (使う:氣を) 等
操作動詞	6例	두드리다: 문을 (叩く:ドアを) 等
経験動詞	6例	겪다: 갈등을 (経る:葛藤を) 等
心理動詞	6例	하다: 생각을 (思う) 等
飲食動詞	3例	들다: 냉커피 (飲む:アイスコーヒー) 等
往来動詞	3例	왔다갔다하다: 방안을 (行ったり来たりする:部屋の中を) 等

第Ⅲ語基につくⅢ-다가は著しく語彙制約性の強い語尾で、해다가用言には形容詞や存在詞は存在せず、他動詞の一部の型に限られてくる:

対人動詞…데리다: 사람들을 (連れてくる:人々を) など3例
 모시다: 친정어머니를 (連れてくる:実家の母を)
 부르다: 차씨라도 (呼ぶ:車氏でも)
 享受動詞…사다: 새끼를 갖다가 (買う:縄を) など6例
 奪取動詞…훔치다: 신발을 (盗む:靴を)

上は実際にテキストに現れたもの、下はそれ以外の해다가用言である:

所有動詞…가지다: 돈을 (持つ:金を)・마련하다: 돈을 (用意する:金を)
 벌다: 돈을 (稼ぐ:金を)・장만하다: 재료를 (用意する:材料を)
 준비하다: 도구를 (準備する:道具を)・
 加工動詞…개다: 이불을 (たたむ:布団を) 굵다: 김을 (焼く:海苔を)
 꺾다: 꽃을 (折る:花を)・
 享受動詞…구하다: 약을 (買う:薬を)・끊다: 옷감을 (買う:布地を)
 빌리다: 책을 (借りる:本を)・뜨다: 옷감을 (買う:生地を)
 奪取動詞…따다: 열매를 (とる・摘む:実を)・뜨다: 물을 (掬う:水を)
 푸다: 물을 (汲む:水を)・
 処理動詞…하다: 빨래를 (する:洗濯を)・하다: 음식을 (作る:食べ物)
 하다: 한복을 (誂える:民族服を)
 操作動詞…물다 (くわえる)・잡다: 물고기를 (捕まえる:魚を)

次のような動詞群は하다가では頻度が高かったが、基本的に非해다가用言であるといつてよい:

非해다가用言…身体動詞・知覚動詞・精神動詞・提示動詞・経験動詞・心理動詞・
 飲食動詞・往来動詞の類

また、하다가論とアスペクト論と重ね合わせてみると、例えば次のようなことが言える：

- ①하다가用言のうち、動詞は基本的に하고있다用言である
- ②非하다가用言のほとんどは、単一主体・単一動作では하고있다形をとらない動詞である
- ③従って非하다가用言のほとんどは無局面動詞である
- ④非하다가用言には自動詞が多い。このことは他動詞は基本的に하고있다形を持つことの裏返しでもある

このように、野間秀樹(1993b)では、接続形による用言分類と、アスペクト的な観点による用言分類との相関について述べたほか、さらに進んで連体形語尾 I-던による用言分類とも一定の関わりがあることを述べた。

意志動詞を始めとする用言の一定のグループが文法形式と深く関わっていることは野間秀樹(1988)(1990a)における<하겠다><할 것이다>、伊藤英人(1989)における非過去形の研究でも触れられていたが、権在淑(1992)などにも現れているように、接続形も用言範疇と密接な関係があることが徐々にわかってきた。一般に用言の文法形式は用言分類と深く関わっていると思われる。

4. 辞書への展開

理想的な辞書には体言や用言を始めとする語彙のclassを記述するべきであろう。そうした将来的な課題は別としても、語彙分類は現段階の辞書の記述にも様々に応用が可能である。

既存の辞書をみると、品詞以外の語彙分類の観点からはまだまだ不十分だと言わざるを得ない。例えば野間秀樹(1993a)で調査したところによると、最も基本的な単語に属すると思われる가다に関して言えば、<-를/-을 가다>という構造を持つ単語結合には次の3つのタイプがある：

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 학교를 가다 (学校へ／学校に行く) | …移動動詞結合 (主に場所名詞と結合) |
| 구경을 가다 (見物に行く) | …外出動詞結合 (営為名詞と結合) |
| 들길을 가다 (野道に行く) | …往来動詞結合 (主に場所名詞と結合) |

日本語の格語尾がそれぞれ異なって現れていることからこの3つのタイプの用例が少なくとも対訳辞典には必須であろう。例えば油谷幸利他(1993)의가다の「行く」の意味の項を見ると、-에・-로・-까지・-를等々、語尾の支配関係は出そうとはしているものの、まだ不十分である。「他動詞的にも用いる」として「새벽길을 ~ 明け方の道に行く」の用例があるが、「학교를 가다」のような-를格が目的とする場所・帰着点を表すタイプの例がない。「動作性名詞とともに他動詞的に用いられて」の注をつけて「등산을 ~ 登山に行く」「쇼핑을 ~ 買い物に行く」などが記述されている点からみても惜しい。やはり辞書には「-를 가다」だけでも最低上の3つの型は

必要であろう。

Xolodovich(1958)・Martin他(1968;1980)を始めとして、安田吉実他(1988)・菅野裕臣他(1988;1991)・油谷幸利他(1993)・大阪外国語大学朝鮮語研究室(1986)とも上の3つのタイプが揃っていない。それでもわかるように、既成の辞書はどのようなカテゴリーの体言と共起するかという共起関係を重視せず、いきなり語義ごとに分けて用例を並べる傾向がままあるので、勢い単語結合の型や共起関係と語義や語彙のカテゴリーとの連関、つまり統辞論と語彙論との連関には関心が薄くなりがちなのである。今後の辞書には、語彙分類を踏まえた、単語結合や共起関係と語義との密接な連関のもとに記述する方向をとるべきであろう。格の共起関係や単語結合の用例への反映というこうした課題には、それぞれの用言別、あるいは体言語尾別の、大規模で徹底した記述的研究が何よりも不可欠の前提となろう。同時に語彙分類を射程にいった単語結合辞典＝連語辞典という形式での辞書化も当然考えられるべきである。

なお、国語辞典では한글학회(1992)・李熙昇(1961;1982)などやはり不十分な中で、김민수他(1991)が先の「-를 가다」の3つのタイプを記述している点が注目される。

以上のような点を考慮すると、単語結合や共起関係と語彙分類に関しては、例えば次のような記述が可能であろう：

가다 行く。

1. 【自】

①《場所名詞・位置名詞など+-에；-로：自動詞の移動動詞結合》…略… 이쪽 길로 저 건물 앞까지 가세요. こっちの道からあの建物の前まで行ってください。…略… ▼「가고 있다」は「行きつつある」、「가 있다」は「行って（既にそこに）いる」。

②…略…

③…略…

2. 【他】▼②③では「가고 있다」「가 있다」の形はほとんど用いられない。

①《場所名詞+-를：移動動詞結合》（目的地へ・に）行く。일요일인데도 회사를 가요? 日曜日なのに会社に行くんですか? 그 길로 곧장 부산을 갔어요. そのついでに真っ直ぐ釜山に行きました。▼「-를 가다」「-에 가다」「-로 가다」の違いは…略…

②《移動する空間・場を表す場所名詞+-를：往来動詞結合》（場としての対象のうちを）行く。그 사람들은 이 험한 산길을 어떻게 갔을까요? 彼らはこの険しい山道をどうやって行ったんでしょうか。 강나루 건너서 밀밭길을 구름에 달 가듯이 가는 나그네 川の渡しを越えて麦畑の道を雲に月行くごとく行く旅人<詩・朴木月：나그네>

③《営為名詞+-를：外出動詞結合》（目的となる営みを外に出かけてしに）行く。동생은 제주도로 신혼여행을 갔습니다. 弟は済州島に新婚旅行に行きました。 빨래를 ~ (川などに)洗濯に行く。 사냥을 ~ 獵に行く。 구경을 ~ 見物に行く。

5. おわりに

これまで語彙分類の試みはなされてきたが、語彙的な意味による分類と品詞分類が主であった。今後は文法との関連における分類、語彙＝文法的なclass分類という方法を積極的に押し進める価値があるといえよう。

本稿で述べたように、語彙＝文法的な体言分類は語彙論のみならず造語論や統辞論等、広い分野に渡る密接な連関の中にある。また、接続形による用言分類と、連体形による用言分類、単語結合による用言分類、そしてアスペクト的な観点による用言分類を始めとする様々な文法的な観点からの用言分類もやはり互いに密接な連関の中にある。そうしたそれぞれのカテゴリー間の連関を描き出すことは現段階の朝鮮言語学の重要な課題だと言わねばならない。語彙分類はまた自然言語の機械処理にも有効であり、更に言語教育上の効果も期待できる。なお、言うまでもなく、用言分類は体言分類と併せて考察されねばならない。また徐尚揆(1991b:59)では副詞아주との共起に名詞範疇との関わりが示唆されているが、このように用言や体言と副詞など他の単語の分類と併せて考察されることによって、朝鮮語の語彙と文法の様相は更に精緻に描き出すことができよう。

●参考文献

*更に広い範囲に渡っては、次の文献目録を参照。語彙論に関しては金光海(1993)に49頁にわたる文献表が付されており、韓国の文献は網羅されている。

文献目録-----

- 高永根・成光秀・沈在箕・洪宗善編(1992)『國語學研究百年史Ⅳ』一潮閣
金光海(1993)『국어 어휘론 개설』집문당
서울大學校大學院國語研究會(1990)『國語研究 어디까지 왔나――主題別 國語學研究史――』東亞出版社
서정수(1990)「외국어로서의 교육을 위한 한국말 문법 연구 및 교육자료 목록」
梅田博之(1989)「朝鮮語」『言語学大辞典(中)』三省堂
小倉進平著・河野六郎補注(1964)『増訂補注朝鮮語学史』刀江書院
志部昭平(1992)「日本における朝鮮語研究 1945～1991」『千葉大学人文研究』第21号
藤井幸之助編(1993)「日本語母語話者のための朝鮮語学習用教材・関連図書目録」『阪南論集 人文・自然科学編』第29巻第1号

辞書-----

- 공업출판사(1979;1985)『우리말 어휘 및 표현』공업출판사;학우서방
과학원 언어 문학 연구소 사전 연구실(1962)『조선말사전』과학원 출판사
金光海編(1987)『類意語・反意語辞典』한샘
김민수・고영근・이승재・임홍빈편(1991)『금성판 국어대사전』금성출판사

南永信역음(1987) 『우리말 분류사전』 한강문화사
 남영신역음(1989) 『우리말 분류사전 (풀이말편)』 한강문화사
 남영신역음(1992) 『우리말 분류사전 (꾸밈씨 기타편)』 한강문화사
 류은중·문창덕편저(1988) 『동의어 반의어 동음어 사전』 료녕민족출판사
 리형태(1990) 『조선동의어사전』 사회과학출판사
 박용수역음(1989) 『우리말 갈래사전』 한길사
 사회과학원언어연구소편(1992) 『조선말대사전』 사회과학원언어연구소
 申琦澈·申瑢澈編著(1974;19774) 『増補版 새 우리말 큰사전』 三省出版社
 유재원역음(1985) 『우리말 역순사전』 정음사
 연변언어연구소편(1982) 『조선말 의성의태어분류사전』 연변인민출판사
 李熙昇編著(1961;1982) 『국어대사전』 民衆書林
 任洪彬편저(1993) 『늬앙스 풀이를 겸한 우리말 사전』 아카데미하우스
 조선어연구회편(1971) 『조선말의성의태어사전』 학우서방
 한글학회(1992) 『우리말 큰사전』 어문각

青山秀夫(1991) 『朝鮮語象徵語辞典』 大学書林
 大阪外国語大学朝鮮語研究室編(1986) 『朝鮮語大辞典』 角川書店
 菅野裕臣·早川嘉春·志部昭平·浜田耕策·松原孝俊·野間秀樹·塩田今日子·
 伊藤英人共編、金周源·浜之上幸協力(1988;1991) 『コスモス朝和辞典 第2版』
 白水社
 金素雲編(1972) 『韓日辞典』 高麗書林
 天理大学朝鮮学科研究室編(1980) 『現代朝鮮語辞典 改訂』 養徳社
 安田吉実·孫洛範編(1988) 『エッセンス韓日辞典』 民衆書林刊、三修社·白帝社発売
 油谷幸利·門脇誠一·松尾勇·高島淑郎編(小学館·金星出版社共同編集)(1993)
 『朝鮮語辞典』 小学館
 Martin,S.E.·李 河·張聖彦編(1968;1980) 『New Korean-English Dictionary
 韓美大辭典』 民衆書林
 Xolodovich,A.A.(1958) "Korejsko-russkij slovar'", Moskva

語彙集(語彙リストを収録するものを含む) -----

강신함(1991) 『현대 국어 어휘사용의 양상』 太學社
 공업출판사(1979;1985) 『우리 말 어휘 및 표현』 공업출판사; 학우서방번각
 국립국어연구원(1991) 『상호, 상품 이름, 아파트 이름 등의 광고에 나타난 국어
 사용의 실태 조사 연구』 국립국어연구원
 문교부(1956) 『우리말에 쓰힌 글자의 찾기 조사』 문교부
 朴英燮(1992) 『개화기 국어 어휘자료집 (신소설편)』 도서출판 솔터
 李應百(1989) 『국민학교 學習用 基本語彙 研究』 大韓教科書株式會社
 정해림(1991) 「『임격정』 낱말풀이」 『林巨正 화적편4』, 사계절출판사
 崔明玉(1980) 『慶北 東海岸 方言研究』 嶺南大學校出版部
 韓國精神文化研究院(1987-) 『韓國方言資料集』 韓國精神文化研究院

青山秀夫・油谷幸利共編(1982)『朝鮮語基礎1500語』大学書林
 青山秀夫・油谷幸利共編(1982)『朝鮮語常用6000語』大学書林
 梅田博之(1971)『現代朝鮮語基礎語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化
 研究所
 梅田博之(1973)『カドリール式朝鮮語1600 上』文林書院
 梅田博之(1976)『韓国語 I・II』東京三中堂
 梅田博之(1985)『NHKハングル入門』日本放送出版協会
 梅田博之(1991)『スタンダード ハングル講座2 文法・語彙』大修館書店
 小倉進平(1944)『朝鮮語方言の研究』上下巻、岩波書店
 金忠植(1977)『韓国語分類単語集』大学書林
 金東俊(1980)『A A諸言語教育基本語彙集(入門期の学習に必要な基礎語彙600項目
 試案)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
 金東俊(198)『ジャンル別基本単語集』神田外語大学講義資料(未公刊)

論文他-----

과학・백과사전출판사(1979)『조선문화어문법』과학 백과사전출판사
 과학원 언어 문학 연구소(1960)『조선어문법1』과학원 언어 문학 연구소
 과학원 언어 문학 연구소(1963)『조선어문법2』과학원 언어 문학 연구소
 金光海(1993)『국어 어휘론 개설』집문당
 南星佑(1985)『國語意味論』永言文化社
 呂増東(1987)『韓國家庭言語』時事文化社
 류은중(1984)「동의어식별에서의 기준문제」중국조선어학회편집『조선어학론문집』
 민족출판사
 류은중(1985)『조선말동의어』연변인민출판사
 서정수(1990)『국어문법의 연구 I・II』한국문화사
 李光政(1987)『國語品詞分類의 歴史的 發展에 관한 研究』韓信文化社
 劉昌惇(1980)『語彙史研究』二友出版社
 임지룡(1989)「국어 분류어휘집이 체계와 상관성」『國語學』19, 國語學會
 정재운(1989)『우리말 감각어 연구』한신문화사
 최완호・문영호(1980)『조선어어휘론연구』과학, 백과사전출판사
 최정후(1983)『조선어학개론』과학, 백과사전출판사
 최현배(1937;1971)『우리말본』정음사
 韓國精神文化研究院語文研究室(1985)『現代 國語 文章의 實態分析』韓國精神文化
 研究院

伊藤英人(1989)「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」『朝鮮學報』
 第131輯 朝鮮学会
 梅田博之編(1989-1991)『スタンダード ハングル講座1~5』大修館書店
 梅田博之・村崎恭子(1982)「(テンス・アスペクト)現代朝鮮語」『講座日本語学11』
 明治書院

- 小倉進平著・河野六郎補注(1964)『増訂補注朝鮮語学史』刀江書院
- 生越直樹(1990)「文法の対照的研究――朝鮮語と日本語」『講座日本語と日本語教育 5』明治書院
- 門脇誠一(1982)「日本語と朝鮮語の語彙」『日本語教育』48
- 菅野裕臣(1982)「朝鮮語の語彙Ⅰ 語彙および語構造」『講座 日本語学 12 外国語との対照Ⅲ』明治書院
- 菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』白水社
- 菅野裕臣(1986)「オノマトペの響き<豊かな語彙と音>」『言語』第15巻第11号
大修館書店
- 菅野裕臣(1987)東京外国語大学講義資料(未公刊)
- 菅野裕臣(1986-7)「中級講座」『基礎ハングル』第2巻 1-12号 三修社
- 菅野裕臣(1988)「文法概説」『コスモス朝和辞典』所収
- 菅野裕臣編訳(1990)『動詞アスペクトについて(Ⅰ)』学習院大学東洋文化研究所
- 権在淑(1992)「現代朝鮮語の用言の接続形-ㄴ까について」『Lingua』第3号 上智
大学一般外国語
- 塩田今日子(1986a)「現代朝鮮語のアスペクト」東京外国語大学大学院修士論文
- 塩田今日子(1986b)「朝鮮語に入った日本語」『基礎ハングル』3号 三修社
- 塩田今日子(1986c)「日本語に入った朝鮮語」『基礎ハングル』4号 三修社
- 志部昭平(1987)「朝鮮語における漢字語の位置」『日本語学』1987.2
- 徐尚揆(1991a)「정도부사에 대한 국어학사적인 조명과 그 분류에 대해」『연세어
문학』제23집 연세대학교 국어국문학과
- 徐尚揆(1991b)「現代朝鮮語の程度副詞について――副詞<아주>の<程度>と
<様態>の意味を中心に――」『朝鮮学報』第140輯
- 趙義成(1993)「現代朝鮮語の-에서格について」東京外国語大学大学院1992年度修士
論文
- 野間秀樹(1988)「<하겠다>の研究――現代朝鮮語の用言のmood形式をめぐって」
『朝鮮学報』第129輯
- 野間秀樹(1990a)「<할것이다>の研究――再び現代朝鮮語の用言のmood形式をめぐ
って」『朝鮮学報』第134輯
- 野間秀樹(1990b)「現代朝鮮語の名詞分類――語彙論・文法論のために」『朝鮮
学報』第135輯
- 野間秀樹(1990c)「朝鮮語のオノマトペ――擬声擬態語の境界画定、音と形式、音と
意味について――」『学習院大学言語共同研究所紀要』第13号 学習院大学言語
共同研究所
- 野間秀樹(1991)「朝鮮語のオノマトペ――擬声擬態語と派生・単語結合・シンタク
ス・テキストについて――」『学習院大学言語共同研究所紀要』第14号 学習院
大学言語共同研究所
- 野間秀樹(1993a)「現代朝鮮語の対格と動詞の統辞論」『言語研究Ⅲ』東京外国語
大学語学研究所
- 野間秀樹(1993b)「現代韓國語의 接續形<-다가>에 대하여――aspect・taxis・

- 用言分類――』『朝鮮学報』第149輯
- 浜之上幸(1991)「現代朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』第138輯
- 浜之上幸(1992)「現代朝鮮語の『結果相』＝状態パーフェクトー動作パーフェクトとの対比を中心に」『朝鮮学報』第142輯
- 浜之上幸(1992)「アスペクトとテキストの時間的構成について――時間的局所限定性・タクシス性の観点から――」『朝鮮学報』第144輯
- 油谷幸利(1978)「現代韓國語의 動詞分類」『朝鮮学報』第87輯
- 油谷幸利(1986)『韓國の中学校教科書――文脈付き用語索引<社会3(上)(下)>』多賀出版
- 油谷幸利(1987)『韓國の中学校教科書――文脈付き用語索引<社会1(上)(下)>』多賀出版
- 油谷幸利(1988)『韓國の中学校教科書――文脈付き用語索引<社会2>』多賀出版
- 油谷幸利(1990)「日本語と朝鮮語の語彙の対照」『講座日本語と日本語教育 7』明治書院
- 北京大学東語系朝鮮語專業・延辺大学朝語系朝鮮語專業合編(1976)『朝鮮語実用語法』商務印書館
- 車旭升・許東振編著(1986)『朝鮮語実用語法』商務印書館
- Guseva, E.K. (1961) "Sistema vidov v sovremennom korejskom jazyke", Moskva
- Rachkov, G.E. (1962) Predel'nye glagoly v korejskom jazyke, "Filologija stran Vostoka" No.306, Serija vostokovedchskix nayku, vyp.16, Leningrad
- Xolodovich, A.A. (1954) "Ocherk grammatiki korejskogo jazyka", Moskva
- Xolodovich, A.A. (1963) "O predel'nyx i nepredel'nyx glagolax (po dannym korejskogo i japonskogo jazykov)", "Filologija stran Vostoka. Sb. statej", Leningrad (日本語訳) A.A.ホロドヴィッチ「限界動詞と非限界動詞について(朝鮮語と日本語の資料による)」菅野裕臣編訳(1990)『動詞アスペクトについて(Ⅰ)』学習院大学東洋文化研究所 所収

言語事実と理論

馬場 彰

0. はじめに

先日、研究室の文書箱を整理していたら、その底から、若い頃書いた「言語事実と理論」と題した拙論と、1986年8月26日に急逝なさった元九州大学文学部教授大江三郎先生から戴いた長いお手紙が出てきた。拙論はきわめて短いものであり、当時『岩波新英和辞典』の編集・校閲に忙殺されていたこともあって、それ以上発展させられないままに発表の機会を失ってしまったらしい。このたび大江先生のお手紙を読み返してみて、当時のことが大変懐かしく思い起こされたのであるが、そこで問題となっていた事柄自体、現時点でも決して価値を失っていないように思われた。また、I don't know that ... という表現をめぐって、語用論的観点からこれほど詳しく議論したものの、たぶん見あたらないであろう。したがって、拙論と大江先生からの返信をあわせて公表することは、決して無駄ではないであろう。

まず最初に、多少の背景的説明をしておこう。今振り返ってみると、1976～78年頃の生成文法研究は、さまざまな理由から一種の停滞期を迎えていた。しかし他方では、語用論とか社会言語学などの研究が活発に行われつつあった時期でもあった。筆者はもともと文学作品を読むことが好きではあったが、理論言語学を専攻する者の常として、どうしても実際に作品を読む機会が少なくならざるをえなかった。その欠陥をなんとか克服しようと考えて、1974年に岡山大学に赴任した際に、さまざまな（文学）作品を教材に取り上げることにし、かつその後11年間にわたって実践したのである。そして授業の副産物として、理論研究の対象になりうるような言語事実を、カードに記録しておいた。その過程で筆者の興味を引きつけたのが、本稿の主題となる I don't know that ... という表現だったのである。以下の拙論中に引用した用例はすべて、その時代に収集したものである。

ちょうどその頃、今井邦彦・中島平三氏の『文Ⅱ』が刊行されたのだが、その中でknowに関して、理論的見地からかなり断定的な記述がなされているのに気がついた。ところが、それと相前後して、月刊雑誌『言語』（大修館書店）誌上に、柴谷方良氏の次のような文章が掲載されたのである。

「理論的な立場でことごとく対立しているG・レイコフとチョムスキーであるが、奇妙なことにこの二人の理論家には共通点がある。それは二人ともあまり言葉を知らない関係上、理論の裏づけとなる言語事実に対する知識が非常に劣るという点である。この点において、アメリカ構造主義者と呼ばれ

るホケット、パイク、それにグリーンバーグといった言語学者と非常に対照的である。現在のG・レイコフの低迷、それにチョムスキーの言語の普遍性に関する早合点等は、貧弱な言語事実の知識に基づいた理論の追求の結果と考えられる。このことを人一倍痛感しているのはG・レイコフ自身であろう。彼は、前にふれたパレットとのインタビューにおいて、過去二十年間みられた理論偏重は不幸なことであるとし、形式化にとらわれない言語記述の重要性を説き、先にあげた学者や、ヤコブソンの業績を称えている。最近あちこちで感じられる、地道な言語記述、または言語事実の集積への動きは、右の考えはG・レイコフのみのものではないということをいみじくも反映している。」（柴谷方良「アメリカ主要大学言語学科紹介② カリフォルニア大学〈バークレー校〉」『言語』1978年6月号、69～70頁）

柴谷氏の文章に、当時の筆者はかなりの共感を覚えたらしく、以下の小論を書くことになるが、上で述べたような事情から公表しないままになってしまった。ところが、1978年の5月に開催された日本英文学会第50回大会のシンポジウム（「英語の語用論的研究の方向」）の内容について、毛利可信先生（当時、大阪大学文学部教授）が『英語青年』（1978年10月号、研究社）誌上で紹介された論考を読んで、その中で初めて、シンポジウム講師の大江先生が I don't know that ... に言及していらっしゃることを知ったのである。（残念ながら、その大会に筆者は参加していなかった。）どうやら、その紹介された内容に多少の疑問を感じた筆者が、大先輩に手紙を添えて拙論をお送りしてしまったらしい。ワープロという便利なものなどなかった時代のことなので、筆者の差し上げた手紙の記録が何も残っておらず、その時何と申し上げたのか記憶に残っていない。

1993年11月に、「英語語法文法学会」なるものが発足し、着実な言語事実の観察を中心とした発表が行われたようである。われわれ日本人研究者が英語を研究する場合、理論的研究と平行させて、市河三喜氏以来の伝統的な、地道に言語事実を集積していく方法もまた発展・継承させていく必要があるのではなかろうか。その場合、以下の議論から分かるように、実際の生きた文脈が大切なのである。言語学者が作り上げたり、改変したりした例文だけでは駄目である。I don't know that ... の場合は、とくにそのことがあてはまると思われる。語用論研究にとって、的確な文脈分析がいかに大切かを知らせてくれるという点からも、拙論で提示した実例は貴重であろうと判断して、あえて公表する次第である。

1. 「言語事実と理論」（1978年6月12日執筆）

『言語』の1978年6月号において柴谷方良氏は、G・レイコフの言葉を借りて、形式化にとらわれない言語記述の重要性を力説されたが、全く同感で

ある。このことに関連して、最近気になることがひとつあるので述べてみたい。

今井邦彦・中島平三著『文Ⅱ』（研究社、1978年）に、knowという動詞について次のような記述がある。

「主語が一人称単数、時制が現在、否定形という三つの条件が備わった文に現れると、補文として間接疑問文しかとれない、という特質がみられる。

- a. I know { that } John loves Martha.
 { whether }
- b. I don't know { *that } John loves Martha.
 { whether }

これは、これらの動詞が、Kiparsky & Kiparsky のいう叙実的(factive) 述語であることに由来している。叙実的述語が主節に現れており、かつ、埋め込み文として－WH補文をとっているような文では、補文の命題の内容が真であると話者が考えていることを前提にしている。したがって、主節で、（補文の命題の内容を）話者が知らない（＝ I don't know ）と述べることは、この前提と矛盾をきたすことになる。よって、上述の三条件の備わった主文の下にはthat節が出現できないのである。」（ 207～208 頁）

しかし、knowに関する言語事実は、上の言説がいかに皮相なものを教えてくれる。

- (1) a. *I don't know that this isn't our car.*
 b. *I don't know but that this is our car.*
 (Kiparsky & Kiparsky: "Fact", 1970, p.148, 脚注)

- (2) *Oh, I don't know that [if/whether] it's all that good.*
 (D. Bolinger: *That's That*, 1972, p.43)

- (3) "Would you like them to kill her?"
 I don't know that I was then prepared to say I should —
 though I believe I came very near it.
 (H. James: *Europe*)

- (4) "She fulfils her own mission," he presently said; "that of being a very attractive young lady."
 "*I don't know that I should say very attractive,*" Mrs. Westgate rejoined. "She is not so much that as she is

charming, when you really know her. She is very shy."

(H. James: *An International Episode*)

- (5) "But you do legislate; it's absurd your saying you don't. You are very much looked up to here —I am assured of that."

" I don't know that I ever noticed it."

(H. James: *An International Episode*)

- (6) "Why, indeed ? You seem most fortunate in having an employe who comes under the full market price. It is not a common experience among employers in this age. I don't know that your assistant is not as remarkable as your advertisement."

(A.C. Doyle: *The Red-Headed League*)

- (7) *I don't know that I like this: (colloq.) I am fairly sure that ... not* (C O D⁶, 1976)

(1) a. は非叙実的意味解釈を与えられるもので、Kiparsky & Kiparsky はこれを 'deliberative clause' と呼び、(1) b. との意味的類似性に言及している。(なお、今井・中島氏はKiparsky & Kiparsky を引用し、感嘆文のCOMPが-WHであることを示す強力な証拠としているが、この注には言及していない。) (2)は、三つの接続詞がこの場合意味的にはほぼ等価であることを示したものである。(3)も(4)も意味的には(2)に近い。(5)では、補文内のeverの存在から、かつてNOT-Transportation (あるいは、NEG-Raising)の名でよく問題にされた現象との関連性も浮かんてくる。(6)になると、(1)-(4)の場合の意味とかなり異なっていて、むしろ(7)のC O Dの記述がそのままあてはまると思われる。この文脈では、少なくともそう読まなければならない。

以上のような言語事実を無視して、I don't knowのあとには+WH補文しかこないと述べる理論先行の言語研究には、やはり、大きな疑問を覚えざるをえない。日本人研究者が英語の変形文法を研究する際には、なおさら、地道な言語事実の集積を続ける必要があると思う。これを、単なる非生産的な語法研究だと片づけてしまってはならない。

2. 大江三郎先生からの返信 (1979年4月8日付け)

いつぞやは、論文「言語事実と理論」「Dislocation・Topicalization再考」「意味分析試論」をお送り下さいましてありがとうございました。種々事情のため、第一の論文をめぐる御指摘についてお答えが大変遅れ、申し訳

ありませんでした。毛利先生の紹介は紙数も少なく、色々な配慮もあったようで、私が重点を置きたかったことが十分に伝わらなかったことも事実です。まして、I don't know that ... が議論の中心ではなく、「言語的、非言語的コンテクストが構造や意味にかかわりをもつ場合、それを研究する分野を語用論という」という漠然とした定義を下した上で、その単なる一例として I don't know that ... を論じたのです。

以下に、論文調で、あの時私が I don't know that ... について述べたことの概略を示し、御指摘に対する私の意見を付記いたします。

X knows that P. はフィルモア流にいて、その主張的意味は X believes that P (is true). 、前提的意味は The speaker believes P is true to people. である。X believes that P. では、この前提的意味が欠ける。上で「前提的意味」といったものは、「前提」という用語の使用に問題があるかどうかは別として、否定によって影響されないなど重要な特徴から、意味記述の中になんらかの形で含めねばならないであろう。上で、The speaker believes P is true to people (including the speaker). としたのは、「話し手がPが客観的に真であると信ずる」ということである。一般の定義では to people (客観的に) がないのがふつうだが、これがないとXが話し手である I know that John is a spy. など、前提的意味と主張的意味とは完全に重なってしまい、I believe that John is a spy. と意味的に同じになってしまうという変なことになる。

例えば She knows [doesn't know] that John is a spy. で、「事実性前提」The speaker believes the proposition that John is a spy is true to people. が存在し、否定によっても影響を受けないということが事実であるとすると、I don't know that John is a spy. のような一人称主語、現在時制の否定文は意味的に非文となるはずである。ところが I don't know that ... は実際には用いられる。

このいい方は、予め立てられた命題を取り上げ、それを婉曲に偽として否認する場合に用いられる。つまりこのコンテクストでは X knows that P. の事実性前提も否定によって影響される。(なぜそうかも、他の例とあわせてかなり一般性をもたせて説明できるが、ここでははぶく。) 次は、シンポジウムで用いた例である。

A. Bridey asked, "Where are mummy's jewels?" "This was hers," said Julia, "and this. Cordelia and I had all her own things. The family jewels went to the bank." "It's so long since I've seen them — I don't know that I ever saw them all..."
(Evelyn Waugh: *Brideshead Revisited*)

B. "Aunt Fanny tells me you make great friends with Mr. Mottram. I'm sure he can't be very nice." "I don't think he is," said Julia. " *I don't know that I like nice people.*"
(Evelyn Waugh: *Brideshead Revisited*)

イタリック体の部分が *I don't know that ...* の例である。Aで *I don't know that ...* が否認する命題とは、同一人物による発話の直前の部分が含意すること（*I've seen them* は *I've seen all of them* を含意）であり、これによって先行部分が述べたことを *afterthought* として修正する。Bで同表現が否認するのは会話の相手が述べたことの含意（*I'm sure he can't be very nice* は、この場合 *You ought to like nice people (, not him)* を含意する）である。*I don't know that ...* はあくまで、予め措定された命題を偽として婉曲に否認するということが重要なのであるが、否認する命題が会話の相手の発話あるいはその含意である場合、しばしばアイロニーになる。Bはその感じが強い。しかしこのような場合、常にアイロニーになるというわけではなく、またアイロニーとそうでないものに明確な一線を引けるというものでもない。私の議論の重点は上の下線を引いたことであり、「必ずアイロニーになる」とか、まして *I don't know that ...* の固有の意味がアイロニーであるとかいうことではない。

次に否認される命題は必ずしも現実に発話されるものとかそれが含意するものではない。単に状況から来る場合がある。Cは Kiparsky & Kiparsky の例である。

C. *I don't know that this isn't our car.*

これは現実に発話された命題（含意）を否認することもありうるだろうが、一般には、見知らぬ人が自分たちの車を自分の所有物であるかのようにいじっているような場合、婉曲に *This is not your car, but our car.* を表し、相手に注意を喚起する言い方で、しばしば、イントネーションにも助けられて、アイロニーの響きをもつ。つまり、これが否認する命題は、言わば人の非言語的行為が示唆する事柄である。

そこで、御指摘の例文に入る。(1)=Cだからよいとして、(3)(4)(5)はすべて会話の相手の発話（の一部）あるいはその含意を婉曲に否認している。その意味でアイロニーになる資格はもっているのに、どれもアイロニーとはいえない。アイロニーとは、婉曲な否認によってかえって否認される命題が偽であることを際立たせ、浮き出させる意図をもって発せられるものだが、これらのいずれの例でも、*I don't know that ...* は文字通りやわらげて否認する（幾分のあやふやさを込めて）意図で用いられている。強いて言えば、(5)

がややアイロニーに近づいている。(6)は同一人物の先行部分の含意の否認である。「この時代の雇い主にとってはめったにないことだ」が語用論的に含意する命題「多分ある人の助手(雇い人)がその人が宣伝するほど立派な者であることはめったにあるまい」を婉曲に否認する。その結果、「多分あなたの助手は宣伝通り立派な人物なのだろう」が含意されるが、ただ、この場合、文脈がはっきりしないので断定はできないが、もうひとひねりしてアイロニーになっている可能性はある。(「宣伝ほど立派な人物であるはずがない」を含意。)含意(アイロニーもその一種)には、ひねりが重なることが多い。

I don't knowのあとのthatはif/whetherに比べて婉曲な否認に傾くが、if/whetherの場合 neutralな疑いを表すことが多い。その意味で、(4)のthatはifに置き換えることは困難である。なぜなら後続談話において、She is not so much that ... と明示的に否認が表現されているから、neutralなifとはあわない。(3)では後続談話で、幾分肯定的な主張がされる。ただ、very near であやふやさが表現されている。したがって、thatを neutralなifに代えてもそれほどおかしくはない。(2)では、all that good が用いられていることから、先行談話の存在が考えられる。ここでは、thatとif/whetherにほとんど差はない。感情的な(驚きを表す)Ohの使用などから、neutralなif/whetherを用いても否認への傾きが暗示されるためと思われる。(allも否定と結びつきやすい。)

辞書の定義は、かなり実目的に左右されるが、(7)のCODの定義もその種のものであり、このようなパラフレーズはコンテキストの支えがあって始めて可能で、それ以上に、「I don't know that ... は、I am fairly sure that ... not を意味する」という主張の意味は私には分からない。実際、両者は無条件で等価ではない。例えば、次のDのイタリック体の部分は、特別のコンテキストを設定しない限り、I don't know that he will come. には置き換えられない。

D. You'd better go to him yourself. *I'm fairly sure that he won't come.*

3. 多少のコメント

毛利先生は、語用論には外向的側面と内向的側面があると述べていらっしゃるが、上の大江先生の説明は、その内向的側面を理論化して述べた、きわめて論理的な議論であると思う。アイロニーが表れる条件規定の部分に多少歯切れの悪さを感じる以外は、反論する余地はなさそうである。

ただ、筆者が挙げた(6)のドイルの実例について、少し補足したい。たったこれだけの文脈しか提示しなかったため、解釈するにあたって大江先生もか

なり苦勞なさったようである。シャーロック・ホームズ物語の中でも飛びきり有名な作品であるので、あえて何の注釈も添えなかったことを、今大変申し訳なく思っている。

軽微な勤勞に対して週給4ポンドを払う赤髪組合に一名欠員が生じ、髪の赤い男性のみに応募資格があるという新聞広告を見せられて、近頃商売が思わしくない質屋の主人ウィルスンが応募し、めでたく選ばれる。(人を食ったような)ブリタニカ百科辞典の筆写の仕事をして何十ポンドかの報酬を受けて喜んでいたところ、ある日突然組合の解散通告を受けてしまい、びっくりしてホームズの所へ相談にやって来るというのが物語の発端である。そして、ウィルスンに問題の新聞広告を教えたのが、先頃相場以下の給料で雇ってくれといったきた、新入りの店員であることを聞き出したホームズが発した言葉が(6)なのである。

したがって、大江先生がおっしゃるような、もうひとひねりしたアイロニーの意味はここにはない。しかし、「予め指定された命題を偽として婉曲に否認する」という基本原理はたしかに当てはまっている。ただし、婉曲に否認される命題は、(6)に提示された同一人物の先行部分が語用論的に含意する命題なのではなく、むしろ、相談にやって来たウィルスンが、新聞広告の怪しさのみに気をとられていて、それをさり気なく彼に見せた新入り店員の方に関心が向いていないことであると思われる。その点に対して、ホームズ特有の直観が働いたのではなかろうか。アイロニーこそないが、「かえって否認される命題が偽であることを際立たせ、浮き出させる」効果をもっていると言ってもよいだろう。もっとも、この前後を読むと、ウィルスンにはそのあたりのところがとんと通じていないようである。

最後に、柴谷氏の発言について一言申し述べたい。さまざまな言語を対象として類型論的研究を推進しておられる柴谷氏らしく、G・レイコフとチョムスキーに対してかなりきついコメントになっているが、氏の予想に反して、その後の彼らの言語研究は大きく進展したのではなかろうか。かつて生成文法陣営内の問題児だったG・レイコフは、認知意味論という形で自分の研究を収斂させてきているし、また、チョムスキーの普遍文法研究は、とくにヨーロッパ系の生成文法家たちによる諸言語の研究をバネにして、80～90年代にまさに長足の進歩を遂げている。その枠組みを基本的に受け入れる筆者としては、「形式化にとらわれない言語記述の重要性」に共感したとは言っても、当然条件付きでのことである。言語現象をとらえるための基本的枠組みあるいは確固たる言語観なくして、地道な言語記述も言語事実の集積もあったものではない。外大の言語研究者たちの間には、記述と理論がまるで両立しないものであるかのような錯覚を抱いている人が見受けられるので、この点はとくに強調しておきたい。

(1994年1月31日)

教育研究学内特別経費

言語研究 IV

1994 (平成6) 年3月

編 者 渡瀬 嘉朗, 在間 進, 敦賀陽一郎
望月 圭子, 野間 秀樹, 馬場 彰

発行所 東京外国語大学
〒114 東京都北区西ヶ原4-51-21
電 話 03-3917-6111